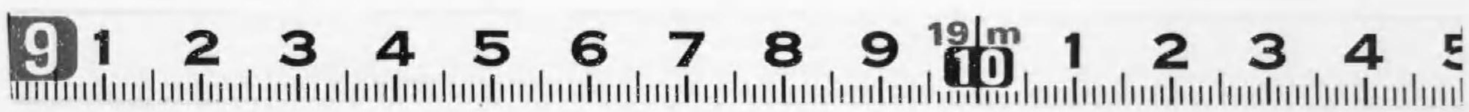

515
99

國民叢書

〔24〕

精神修養

小林鶯里著

文藝社

國民叢書

第廿四編

精神修養

小林鶯里著

大正
14. 4. 8
閲了

515-99

國民叢書刊行の趣旨

我國は最近五十年の間に長足の進歩を示し一躍して世界一等國の圏内に入りました。此の新興の勢は流石の歐米先進國も追從を許さない程であります。

我國は既に建國三千年、その間一度びも侵された事のない立派な歴史を有してゐるばかりでなく、萬世一系の天皇を戴いて、實に世界に類の無い國體であります。從つて我國は世界最古の國であると同時に又世界最新の國です。然るに最近讀書界の傾向を見るに徒らに奇らしい事を好み、新らしい事を求め、皮相な自然主義にかぶれ、加ふるに危險な外來思想の爲めに我國獨特の堅實な思想は動搖し、總

てが物質的となつてきました。

此の儘で押して行つたなら實に我國の將來には憂ふべきものがあります。私は此の點に鑑みて、簡易にして健全なる國民必樞の知識を注入しやうといふ意志から、編次內容の種類を精選して、嚮ては英國のカッセル文庫、獨逸のレクラム叢書の樣に國民常識の源泉にしようといふ抱負を持て本叢書刊行に着手致しました。滿天下の諸賢、幸に本叢書刊行の趣旨に贊同せられ、其の完成に向つて援助下さらば私の幸とするところであります。

小林鶯里

序

紛糾せる思想問題の眞たゞ中に立てる吾人は、徒らに淺薄なる上ッ調子な理解に甘んじて居る時でない。須らく、有ゆる精神科學の上に現はれて居る傾向と歸趨とを大觀し、徹底的理解を得るの途に出でねばならぬ。その行程の第一歩に於て、過去の人は如何なる事をしたか、將來に傳ふる事蹟などを究めねばならぬ。本書は其れ等歷史的人物の美談逸話を錄し、精神修養の資に供せんとするものである。勿論時代の推移は其の悉くを可とするを許さぬ、取捨選擇は諸君の任意とし、玆はに殊更に評論を加へず、有のまゝを傳ふるを主としたのである。

鶯里山人

精神修養（目次）

忍耐

伊藤仁齋……一
大石良雄の忍耐……五
韓信……七
ソクラテスの忍耐……九
松平信綱……一一
張公藝……一三

儉素

古名士の質素……一五
松本十郎と婚儀……一七
松下禪尼と時賴……一八
板倉重矩……一九

家康の質素……一〇
明君の節儉……一一
光圀の儉約……一二
土井利勝……一三
秀吉の妙藥……一五
大江元就の用意……一六

貞順

松岡女史の操行……二〇
初鹿野源五郎の妻……二一
松平光政の室……二三
王醜々自焚して辱を免る……二四
義經と貞女……二五
三宅尙齋の妻……二七
木村重成の妻……二八
ヂスレリー夫人の內助……四〇

コロンブスと夫人……四一

仁慈

清正士卒の生命を重ず……四六
眞田信之と烏籠……四七
市尹ドラマンド……五二
サー、ヒリップ、シドニー……五四
チタス帝……五五
名將カロシュスコ……五六
アルフォンソ王……五八
リンコルンの涙……五九
趙盾一飯の恩……六〇
那波活所……六一
中納言治貞夜番をなす……六二

廉潔

天野康景……六六
賴春水の廉潔……六八
橘良基……六九
紀夏井……七〇
許衡と梨……七一

禮讓

南洲禮義を重んず……七四
治太夫と清三郎……七五
藤原良繩……七六
チウリンの英人……七八
アイザック、ニウトン……八〇

信義

豊臣秀吉……八七
申顔……八八

荀巨伯……八九
回々教徒と西班牙人……八九
松本順と舊恩人……九一

友愛

石野兄弟の友愛……九五
北條泰時……九六
板倉勝重……九七
荀荀牙人兄弟……九八

——（目次了）——

精神修養

小林鶯里著

忍耐

近頃は、成功の秘訣〳〵といふことが大層流行して、新聞にも、雜誌にも著述にも、八釜敷稱へられ、世の青年諸君も、好んでこれらの記事を讀むといふ風であるが、敢て惡いことではないけれども、秘訣といつたからとて、人間の思想以上に、何物かゞ示す特別の方法がある譯のものでないから、他人の寶ばかりかぞへて、自分には一錢も得ないといふやうな愚なことをせずに、先づ一旦志をたてた以上はそれを成遂げるまで、どんな艱難辛苦に出遇つても耐へ忍ぶといふ心を養ふのが、

何より肝要なことである。

若も此忍耐力がなかつたならば、いかほど立派な目的を持つて居るにしても、中途で廢絶するやうな悲運を招かなければならぬのである。また中途で廢したならば一生涯浮浪の身となつて、何等の値もなく、面白味もなく、遂に此世が厭やになつて、自殺するより外仕方がないやうなことになるのである。

世の中は、萬事萬端、濡手で粟の掴み取りといふやうに、容易く成功するものではない、必ず他人から誹りを受ける事もあり、恥辱を受けることもあり、又恨みもうけ憎みもうけるので、幾多の艱苦と危險は、自分の身の邊を取圍んで居るのである。それで是等の艱苦と危險を忍ぶ偉大なる力がなかつたならば、とても其の志を成就することは出來ぬ。

人間といふものは、自分の情に適ふ事があれば喜び勇み、情に逆ふ事があれば怒り腹立つのである。これは天性であつて、十人が十人、此の心のないものはないの

であるから、自分が常に尊敬して居る人、大切にして居る事を、他人から侮り辱しめられたときは、大に之を恥とし、意氣を張るのであるが、是は敢て不當と云ふことは出來ぬけれども、かゝる折にも、先づ自分の念頭を鎮め情波を澄し、明白に事理を辨へた上で、相當の處置をとらなければならぬ。激怒に乘じて、大聲をあげ、あらあらしく人を罵り、又は蠻行に及ぶときは、爲めに不測の禍を招くに至るのであるから、惣じて順境であるからとて油斷をせず、逆境であるからとて暴擧妄動せず、鞏固なる忍耐力を以て、目的地に進まなければならぬ。

之を譬へていふならば、彼の深い山奥から流れて出る溪水が、或るときは巖石に障礙ぎられ、あるときは兩岸に衝突つても、流れ〳〵て遂に茫々たる海洋に達するやうなもので、實に忍耐力より強いものはなく、成功の秘訣もまたこの二字に存するのである。

伊藤仁齋

伊藤仁齋は、京都の人て、其の家は代々商賣を業として居つたのてあるが、仁齋になつてから始て儒學を治め、刻苦自ら勵んだのてある。親戚の者は之を阻んで、「儒者になるよりか、お醫者になる方がよい」と色々忠告をしたが、仁齋は其の勸告に從はなかつた。それからして家は益々貧乏になつて、人の勸告も一層甚しくなつたが、仁齋は志を執ること益々堅く、後遂に大儒と爲つた人てある。或る時、歳暮になつて。糯米を得ることが出來ないので、妻は跪いて、「家道の艱難は如何程であつても、妾は固より甘んじて居りますが、忍びないのは何も知らない子供であります、隣家に餅のあるのを見て羨み、連りに强請つて已みませぬ。口ては呵責つて見るものゝ、妾の腸は斷れるやうてあります」といつて、涙を流すので、仁齋は机に凭つて書見をし、默つて何も言はなかつたが、早速著て居る上衣を脱て、妻

に渡したといふことてある。

大石良雄の忍耐

元祿年間、播州赤穗の城主淺野内匠頭が、殿中て拔刀した科て、其の國を取り上げられた際、赤穗の老臣大石良雄は、瓢然と江戸の地を去つたので、心ある者は、良雄に復讐の志があるのを悟り、其の評判は都鄙に傳つたのである。良雄は大變其れを心配して、これては仇敵の吉良上野介がきつと油斷せないだらうと思ふて、自分等に復讐の心がないといふことを知らせるため、故と遊蕩三昧に耽つたのである。或る日、京都島原の妓樓に登つたとき、喜劍といふ薩摩の人も、同じ其の樓に居つたのであるが、喜劍はまだ良雄と一面識もないが、かねて良雄の人物を聞いて居つたので、彼れはきつと主君の仇を報ゆるであらうと信じてゐたが、何ぞ圖らん良雄が登樓して、妓女と戯れて居るのを見て、不愉快てならぬから、私かに良雄を

一室に招いて、優しく復讐のことを諷したが、良雄は何とも感じた樣子がないので今度は剝出して直言勸告したが、良雄は毫も承服した樣子がないのみか、高笑をして、言ひたいことを吐き出すので、喜劍は大に立腹し、「汝は人面獸心である。主人は切腹し、國は取り上げられたにも拘はらず、汝は家老でありながら仇を報ゆることを知らない。畜生でなくて何であらう、汝は畜生のやうに汝を待遇つてやらう」と罵りつゝ、左の足を良雄の前に突き出し、魚肉を足の指に狹んで、良雄に食はせると、良雄は少しも驚かず、首を垂れて其の肉を食ひ、そのうへ舌を出して喜劍の足の指を嘗めたので、良雄の笑ふ聲と、喜劍の怒る聲とで、一時は樓外に聞えたといふ程であつた。それから一年餘を過ぎて喜劍は藩命を佩びて、江戸に上つたが、丁度其の時、赤穗の義士が仇討をして、同志の者が四十七人、大石良雄は其の首謀者であるといふことを聞いて、喜劍は大に驚き、先年良雄の心を知らないで、彼れに耻辱を與へたのを後悔し、「我が良雄を畜生と見たのは、我が目

の罪である。我が良雄を畜生と罵つたのは、我が口の罪である。我が良雄に、足で魚肉を食せたのは、我が足の罪である。我が良雄を畜生同樣に待遇つたのは、我が心の罪である。我が一身は罪で滿たされて居るから、死ぬるより外に道がない」と覺悟を定め、早速僞病氣をこしらへて鄕里に歸り、公のこと私のことなど事務を處理して、江戸に來て見ると、其の時、良雄等は既に切腹を仰せ付けられて、泉岳寺に葬られた後であつたので、喜劍は直ぐに泉岳寺に行つて、恭しく良雄等の靈を弔ふて、「我は地下に於て罪を謝せん」と云ひつゝ、刀を拔き、腹を屠つて、良雄の墓前に死んだといふことである。

韓信

漢の韓信は、淮陰の人である。家は至つて貧乏なので、以前下鄕南昌の亭長のところに寄食して居たが、亭長の妻が之れを苦しめたので、韓信は、其の家を去つて

城下に釣をして居つた。偶〳〵一人の老婆があつて、其の有樣を見て氣の毒に思ひ、數十日の間、御飯を食べさせた。或る日のこと、韓信は、老婆に向つて、「後日きつと此の厚恩に報ゆるであらう」といふと、老婆は怒つて、「大丈夫たるものが、自分で食ふことが出來ず、實に不憐でならぬから、斯うして衣食させたのである。何うして汝から報をうける樣なことを望まうぞ」といつたと云ふことであるが。當時韓信の寒貧も之れて知れるのである。それから又淮陰の少年が侮て、「身體は長大く、刀劍は帶びてゐても、中情は怯い奴である。若し美事死を恐れないならば、我々を刺し殺して見よ、又死ぬることが出來ないならば、跨の下を潛れ」といつたが。韓信は此の少年の侮辱を聞いて、じつと視て居たが、やがて少年の跨をくゞつて出たので市中の者は皆な韓信を笑つて、卑怯者としたといふ。されど後には漢の大將と爲り高祖を佐けて、楚の國を滅し、天下を定めたので、世の人々ば、韓信の忍耐力の强いのに感じ、其の人物を譽めないものはなく、蕭何、張良と併せて、天下の三傑と

稱するに至つた。

ソクラテスの忍耐

希臘の大哲學者ソクラテスは非常に堪忍づよい人で、平生友達に、「私が怒るやうなことがある場合には、遠慮なく注意をしてくれよ」と頼んで置いたのである。それで時によつて、短氣を起し、怒り腹立つ樣な場合に、友達から心付を聞くと、初めは聲を低ふし、次第に口を閉じて、無言になるのが常であつた。或る時、氏が召使の下人に向つて、大變立腹したことがあつたが、ソクラテスは怒りを取鎭めて、「若し私が怒つたならば、きつと汝を打つたであらう」と云つた。又或人が平手で氏が鬢の處をしたゝか打つと、氏は笑つて、「兜を被着なかつたのが我の不幸である」と云つた。又或る時友達と同道して、市中を往來せしに、一人の紳士に行違ひ氏は叮嚀に挨拶したが、彼の紳士は素知らぬ顏て過ぎ去つたので、同行の友達は此

の有樣を見て、「彼の男は無禮千萬な奴であるこの儘には捨て置かれない」といふと、氏は靜に、「卿等は途中で見苦しい服裝の人に逢つても、之を責むることは出來まい、それと同じやうに、卿等より心術のよくない人に逢つたからとて、之を責めねばならぬ道理はないてはないか」と答へた。ソクラテスの夫人エキサンチップは古今無類の癇癪持ちで、殆ど狂婦といつてもよい位であつたから、氏は常に亂暴無法の待遇を受けたのである。一日、エキサンチップは些少の問題からして、氏に對して大に立腹し、往來の道で、氏につかみかゝり、其の羽織をひき裂いたので、氏の友達は見るに見かねて、「いかにも亂暴極まる振舞である、このまゝ打ち捨てゝは後日の爲めにならぬから、痛く鞭つて懲らされよ」といふと、ソクラテスは、成程面白い門芝居であらう、卿等は、私と妻と擺闘するところを見物してをれば、如何にも面白い一段のなぐさみであるであらう」と云つて、少しもとりあはなかつた。又或る時、夫人が餘りに癇癪を起し、何うしても鎮まらぬので、氏は部屋から出て、

戸の外に立つて居たが、夫人は、氏が落ち付き拂つて居る樣子を見て、一層烈火のやうにいらだち、二階の梯にかけ上つて、ざうきん桶をさかさまにして、濁水を良人の頭に灌ぎかけた。けれども氏は何んともせず、から〳〵笑つて云ふには、「こんなにはげしい雷鳴の時には、驟雨が降るのは當然である」と。

松平信綱

松平信綱が武藏の川越を領して居たとき、領内に野火止といふ邑があつたが、土地は痩せ水は少く、丸て野原の樣であつたので、代官安松金右衛門が建議して、「何うか新しく梁を鑿つて、玉河から水を引き、稻田を開拓したいものである」といつた。そこで信綱は其の費用を尋ぬると、三千兩程かゝるといふから、「考へて見ると私は此に久しく居るものではないが、三千兩て後々の人を利益すると云ふことであれば、其れは私の爲すべき本務である」と、早速命じて其の事を監督させた。そこ

で金右衛門は數百人の役夫を集めて、小川村から新河岸まで十六もある長い梁を竪つたが、水は來ず、梁の中がすこしうるおうばかりであつた。信綱は不思議に思ふて、其の譯を詰ると、金右衛門がいふには、「臣も其の理が解りません何うか來年迄待ちませう」と、明年になつても矢張水は來ない、信綱は又金右衛門を責めて、「汝は特に地勢の高低を察しないから、それでゝあらう」といふと、金右衛門は、「いや決して左樣なことは御座らぬ。臣は今になつて悟りました。其れは古に河潤二九里三といふことがあります。今此の土地は武藏曠漠の中にあつて、土は燥き風は多く、砂塵は吹いて座敷に入り、お客が來る毎に席を掃ふのでありますが、今年ばかりはそうでなく、野菜の出來も、前日と大變違つて參りました。是れは河水の潤が土地に入ることが深いのでありませう、して見ればたつた今水が來るに違ひありませぬ」と答へた。其の明年、或る夕大雨が降つて、其の聲は雷のやうであつたが、俄に奔流衝決して、十六里の新河は一時に滿水した。そこで信綱は大に喜んで、「金右衛門

が三年の永い年月の間、志を挫かずして、其の工事を監督したのは、洵に感賞すべきものである」といつて、其の祿を增し、後には立派な官職に就かしめたといふことである。凡べて何事でも、忍耐力がなくては、決して成功するものでない。

張公藝

唐に張公藝といふ德者があつた。或る時、高宗が其の宅に行幸せられて、公藝を召し、「一族の者が和睦するにはいかやうにしたらよいか」、と問はれた。すると公藝は「紙に書いて、答へ申しませう」といつて、忍といふ字を百餘り書いて進上し、其の意を述べていふには、「宗族が一致協和しない所以は、身分の尊い者に衣食が均しくないことがあつたり、又卑い者に禮節が備はらないことがあつたりして、互ひに責め合ふから、遂に爭ひをする樣になるのである、苟めにも相與に忍び合ふ心があつたらば、不足の念は起らず、家道は睦くなるものであります」と。

儉素

作業を勵んで金を儲けるのは、固より大切であるが、之を得た以上は、よく〳〵注意を加へ、成るべく質素な生活をして、濫りに費さないことが最も肝要である。

如何に多くの金錢を儲けても、同時に費したならば、何事も働かないのより勝つて居ると云ふまで、何の益にもならず。若し又勵んで働きもせず、或は些少の儲をしながら、思ふまゝに之を費したら、忽ちの間に財産を盡くし、遂には負債をして首も回らぬ困難に陷るのであるから、最もわるい。

されば、各自の得るほどに從つて費すのが至極大切である。さりながら、得たのを皆費してはならぬ。平生儲けた幾分を貯へ置いて、病氣又は老年になつて、勞役に堪へられない時、若くは不意の災難にかゝつた時の費用に充てるのである。如何程些少の儲をする者でも、なるべくはすこしづゝ貯へて不意の備をなし置かねばな

らぬ。如何程富める者でも、質素を旨とし、必要の事にのみ金錢を費さなければならぬ。若しも無益の事、又は惡しき娯樂に之を費したならば、淵河に投げすてるよりも、其の害は實に甚しい。なぜかといへば、それだけの勞力と、それだけの金錢は、全く世の中の損耗になるからである。

しかし金錢ばかりではない、まだ用に立つべき食物、器具抔を、猥りに棄て、又打毀はさぬやうに注意するのも大なる儉約である。

兎角、人には虚榮心があつて、外見を飾りたがるものであるが、いかに華やかに身體を飾り、いかに美しい家に住んで、いかに立派な器の中に、澤山の御馳走を盛つて食べても、それで人の價が增すものでもなく、世の爲めになるものでもないから、成るべく質素の生計をして、儉約を守るのが、何より大切である。

古名士の質素

徳川三代家光の時代に、御咄の相手として、毎日登城したのは、甲斐守毛利秀元、丹羽五郎左衛門長重、蜂須賀家政、林道春等の人々である。是等の人々が萩の間で、各自の辨當を食する時に、珍敷い菜抔があると、互に取かはして、賞味すると云ふ風であつたが、或る日、毛利侯の辨當に鮭があると、是れは近來の珍味であるといふもので、皆なが分けて賞味したといふことである。又阿部重次は、燒飯を紙に包で持參し、それを食べる時に、包紙の皺をのばし、其の紙に付いて居る飯粒を拾ふて食ひ、其の跡で鼻をかんだといふことである。寛永時代の英豪が、如何に質素な生活をしてをつたかは、之を以て推察することが出來る。又武勇の聞えある上杉謙信は、どうであるかといふに、不斷酒盛をするときに、其の肴は梅干であつたといふ。又徳川秀忠は、備前侯松平新太郎光政が、初めて見參した時に、料理を下されたが、その膳部の品は、蕪汁に、おろし大根のなます、あらめの煮物、乾魚の燒物計りであつたといふことである。是等の人々の生活を今日に比較たら、果

してどうであらう。

松本十郎と婚儀

松本十郎は庄内の人で、以前開拓使大判官の役を勤めたが、其の性行は頗る奇拔で、人の意表外に出ることが多かつた。或る時、酒田縣大參事某が、其の女を貰ひたいと頼んだら、十郎は早速これを承知したが、さて愈々婚禮の儀式を擧げるといふ晩に、某の内では用意周到、凡百の禮式は一として備はらぬといふことなく、接客の人は門に出て、頸を延ばして、新婦の籠が來るのを待つて居ると、十郎は徒歩で、而も自分で箱を負つて、女の手を携へて來たのである。其の後、十郎が人に告げて、「予は好んで斯樣な奇行をしたのではない、暗に新夫婦を誡めるためにしたのである」といつたといふことである。現時の如き、虛禮虛式を以て充された世には、どうか松本のやうな必得を持つもの

が、一人でも欲しいものである。

松下禪尼と時賴

松下禪尼は北條時賴の母で、至つて儉素な人であつた。或る時のこと、障子の破れて居るのを切張されるので、兄の義景が、「障子の切張は不體裁なものであるし、そのうへ手數もかゝるから、いつそ新しくする方がよい」といふと。禪尼が云ふには、「我も其の事を知らないのではないが、凡べて物は少し位破れたものは、修補して澤山である。それを一々新しくするのは不經濟極つたことであるから、此の事を小兒等に知らせる爲めに、斯樣に切張して居るのである」と。かゝる禪尼に育てられたから、時賴も亦儉素な人で、食事にも決して贅澤はしなかつたのである。ある晩、伯父の大佛宜時が來たので、自分で酒を暖め、「獨り飲むよりか、汝と共にする方が、非常に愉快である」といつて、杯を交はして飲み始めたが、何にも肴がない

のて、宜時は紙燭を點して厨に行き、つと殘醬を索し出し、其れを嘗めて、夜中對飲したといふことてある。其の淡泊な生活は驚くの外はない。

板倉重矩

板倉重矩は野菜を畑に植ゑて、お客があると手づから摘んて之を薦むると云ふ風て、自分の室には咬菜軒と云ふ額を懸けたのである。其の後、高官に昇つた時、或る人が彼に向つて、「以前君が下官に居つた頃は、いつも野菜を食べても可いが、今老中と爲つて猶菜を喫するのは、恐らく識者の誹を免れないてあらう」といふと。重矩之に答へて、「大抵世の人は、高位に昇進して、多額の給料を得ると、貧賤の時を忘れ、驕奢に長じて爲めに其の身に災害を招く者てあるが、予は不肖ながら、此の菜を喫し自ら知足の警とするのてある」といつたといふことてある。富に處して尚貧を忘れずとは、蓋し板倉重矩の如き人をいふのてあらう。

家康の質素

家康が質素な生活を旨としたことは、「死後の廟社まで手輕に經營すべし」と、板倉内膳正に遺言したのを見ても能く知れることであるが、左の上意文等を讀むと一層公が質素を旨としたことがわかる。其の上意の文は、

一、大厦千間、夜臥八尺、良田萬頃、日に食ふ事二舛、千疊敷、萬疊敷の家を持つも、臥所は疊一疊なり。又前に八珍を連ぬると雖も、食するは口に協ふ物二三種に過ぎず、天下の主にてもつゞまる所は、唯一飯より外は用なし。

又其の遺訓に、

「不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし」と、身は將軍の職に就き、天下の政權を掌握した後でも、衣服膳部都て質素を旨とし、僅に古足袋一足でも、容易に棄ることはなく、之を近臣に頒つたといふ。又、

「私は五十歳を越て始めて玉子燒の甘い味を覺えた」といつたこともある。又曾て大坂攻の時、薪水所へも左の令を下したといふ。

膳は米五舛、干鯛一枚、味噌、鰹節にて事足るべし。

以上の事柄に就て觀察すると、德川家康が如何に質素儉約を旨として居つたかゞわかる。

明君の節儉

古來、高貴の位に在つて、節儉を以て有名な人々は澤山ある。

△アレキサンダー大王は、臣下と同じ樣な、質素の服を着けられた。

△羅馬合衆政治の大統領カトーは、上衣一枚を調へるに、百片以上を費したことはない、平生人に告げて、如何程價は些少でも、不用の物は高價であると思ふといはれた。

△かつて殆んど全世界を一統せられたオーガスト皇帝は、皇后、后妃だちの手づから織られた衣服を着けられ、寢蓐も臣民と同じやうなのを用ひられた。

△オーストリヤ家の祖先である日耳曼のロドロフ皇帝は、いつも粗服を召されて、見苦しい程てあつた。ある時、麭燒の家に立寄つて、火にあたられると、其の家の妻は、皇帝であることを知らないものであるから、大變見苦しい人であると、痛く罵つて追ひ出したことがあつた。

△ドロフ帝の後裔て、西班牙と日曼兩國を領せられたチヤーレス五世も、威名の燦々たる皇帝でありながら、常に質素の服を着けられた。

△又佛蘭西のルイ第十一世も、チヤーレス同樣て、衣服に奢られたことはない。ルイ王の手帳の中に、古い背心羽織の兩袖をつけやうと、價二志の棉花を求められたこと、又長靴の脂一片半許を求められたこと抄記してあつた。

斯樣に、何れも世に名高い國王て、一身の爲めに費す所は、極く儉約てあるが、

軍事又は國家の事に就いては、幾千萬の大金を費やしても、毫も吝まれなかつたのである。

光圀の儉約

水戸中納言光圀が、平素何事につけても、儉約を守られたことは有名であるが、就中、公〻紙を用ゐられるに深く注意せられたのは、大に感心すべきことである。公は常に來翰の首尾にある餘白でも、其のまゝに棄てるといふことはなく、必ず之を切りとつて接ぎ合せ、何にかの用に立てさせ、又詩や歌の草稿にも白紙を用ゐるといふことなく、何時も反古紙の裏に認めらるゝ位であるから、疊の上などに水をこぼした時も、布片て拭ひ、紙は一枚も用ゐられたことはなかつた。それゆゑ侍女等にも紙は大切にして、苟且にしてはならぬと度々誡られたが、兎かくに苟且にするのを大變心配せられた餘り、或る年の冬、老女某を招かれ、「予は紙を製造す

る業が非常に面白く思ふから、汝等も見聞のため松草村の紙漉場に行つて見て來るがよい」といはれたので、侍女等は面白半分保養かた〳〵打連れ立ち、松草村の製紙場に行つて見ると、案に相違し、其の紙漉場といふのは、同村中央の川原に設けてあつて戸障子などの備はなく、たゞ布幕を四面に張つたばかりであるから、肌をさるやうな川風が折々吹いて來るのでさへ堪え難いのに、彼の職人共は赤脚で水に入り、又は兩の手を紙汁の内に浸し居るのを見て、夏涼しく冬暖き大厦高樓に棲み馴れた侍女等が、何うして心棒が出來やう、皆ぶる〳〵戰慄つゝ、匆々にして館に歸り、見て來たことゞも語りあひ、製紙業の非常に困苦なさまを、老女から申上げると。光圀は、女中等一同を前に召し、「製紙の困苦のことを如何やうに思ふたか予が平常一枚の紙をも苟且にしてならぬと誡しめたのも道理ではないか」といはれたので、一同はたゞ恐れ入り、平伏して退いたが、夫から後は侍女等で濫りに紙を費すものがないやうになつたといふことてある。

土井利勝

土井利勝が、ある時、一尺餘の漢絲を、近臣大野仁兵衛に命じて、「これを大切に始末つて置け」といふたので、或る者は、利勝が鄙吝であるといつて、大層笑つたが、土井は知らぬ顏をして居つた。ところが其の後三年程たつてから、利勝の刀の條の端が釋けたので、仁兵衛を呼んで、漢絲を持つて來いといふと、仁兵衛は早速腰袋に入れて進上した。すると利勝は、自分で其の絲をとつて、刀の條をくゝり、につこり笑つていふには、「無用の者も、今日になつて、始めて役にたつた」と、遂に其の宰の寺田某を呼び寄せて、「吾は、仁兵衛が謹直で、能く命令を重んじたから祿を三百石程增與してやる。元來漢絲は、支那の物で、支那の婦人が辛苦をして製造したものを、展轉運送し、大海を渡つて、始て日本に持來つたのてある。其の間に、人手をかけて居ることは何の位か分らぬ程であるから、一尺一寸の端絲てあつ

ても、之を棄るのは、天物を損ふので、思へば勿體ないことである。然るに今仁兵衛が、吾の命令を重んじて、今日迄保存して居つたのは、實に感心な者である」といひ渡し、更に戯て、「僅か一尺の絲で、三百石の祿を取つたら、それで澤山であらう」といつたといふことである。

秀吉の妙藥

太閤秀吉が百病の妙藥とて、左の語を示した。

妙藥三味、天を恐れ、身を修め、儉を守る。

禁物四味、禮なし、邪欲を用ひ、物に怠る、非を行ふ。

大江元就の用意

大江元就が、或る年の正月元日の早天に、手水をつかひ、うがひをして、東の方

に向ひ、暫く默坐して居ると、近習の士が罷り出て、元三の御祝を召上らるゝやうにと伺つたが、別に何んとも返辭がない。其の後兩三度言上すると、元就は其の坐を立ち起り、嚴としていはるゝには、「汝は元三を祝する道理を知らない、抑々世間の愚かなものは元日に惠方を拜み、昆布栗を取て屠蘇の酒を酌み、壽命長久子孫繁榮を祝して別に深い考慮を持つて居ない、今我が志す所は、元日は年の始月の始日の始であるから、寅の一天より起きて、一年の工夫をするのである。例せば去年から今年を思ふに、去年東國は五穀が熟して豊饒であつたので、民百姓も滿足して、不意に兵亂は興らず、兵糧に事は缺かないが。西國の方は、水損旱損で、萬民も安堵の思ひをして居ない。されば假令兵亂の危い目に遭はないても、其の艱難を救ふために、色々の手段を考へて、儉約を守らなければならぬ。其れから又召仕ひの諸士へ觸渡す個條を案じ、雙方滿足して、國家安全の用意をなし、一旦緩急の事に出會しても上下當惑をしない樣にしてこそ、元日の祝となるのである。され

ば一年の計は春にあり、一日の計は寅にあり、一生の計は勤むるにあり、起きべき時に起きないて、其の日の用を缺く樣な事は、大將たる者の行跡でない」といはれたといふことである。

貞順

婦女子の守るべき道は澤山にあるが、その中で、貞操和順は婦德の最も大なるものである。

女子たるものは、自分の家に居るときは、幽閒靜淑にして、非禮の事がない樣に謹み深くし、一旦嫁して、人の妻となつた以上は、終身貞操和順の德を守つて、如何なる事變に遭ふても、決して其の德を損ふやうな事があつてはならぬ。

婦女子は、男子よりも感情に強く、從つて意志の力が微弱なものであるから、些些たることにても、自分の氣に入れば、一途に愛著心を起し、氣に入らぬと、どこ

迄も憎むと云ふのが、普通一般である。であるから、一旦嫁した後も、遂に夫婦離別の悲運を招くものが、世間には仲々多いのである。

一體、夫婦の間と云ふものは、愛情が基礎となつて、成立つものであるから、淫逸にして、爲めに此の愛情を損ふ樣なことがあると、決して夫婦間の和合は保たれず、延いて一家の不和を招くのである。其れ故に、人の妻たるものは、能く其の夫に對して、貞操を盡し、溫き愛情を絕たない樣注意せなければならぬ。

昔しから、男子は天の陽氣を稟け、女子は地の陰氣を稟けて居るのであるから、夫は外に出て活動し、妻は內にあつて扶助し、內外相和し相順じて、夫婦の道を全ふせなければならぬといつてあるが、成程その通り、男子と女子は性質もちがへば才能もちがつて居るものであるから、各々其の天職を盡して、一家の幸福を計ることに務めなければならぬ。若しも男女同權といふことを誤解して、夫を輕蔑し、盡すべき和順の道を守らず、貞操の德を破るが如きは、既に婦人としての人格を備へ

たものと云ふことが出來ず、一家は勿論、自分一身の幸福をも得られないことになるのである。

されば婦女子たるものは、婦女の道德を日夜に省みて家内の和合を計り、家政を整理し、夫をして後顧の憂なからしむる樣に心懸けねばならぬ。些細なことに愛憎の念を逞ふして、爲めに婦德を損じ、耻を千歲に貽すやうなことがないやう、注意を加へて、愼まねばならぬ。

松岡女史の操行

松岡女史は、名を小鶴、假號を縞衣といつたが、播磨國神東郡辻川村の人で、孝貞なる烈婦であつた。女史は詩文を善くし、かねて算筆にも達し、一子約齋が博學の評判を得たのも、全く女史の敎養によつたのである。女史は明治六年十月十五日に死んだが、南望篇、をだまき草、詩歌文稿各一卷の遺著がある。女史がかつて寡と

なつた時、世間の人々が、「彼は今こそ操行を守つて居るが、後にはきつと醜態を演ずるであらう」といつたので、女史はこれを聞いて憤りにたへず、自ら誓詩を作つてこれを神祠に掲げたといふことである。

初鹿野源五郎の妻

貞婦二夫に見えずといふ事は、史傳に多くのせてあるが、戰國の世では、諸侯の臣で戰場に死んだものがあると、その人の名を繼がせて、敵軍に名士の死んだのを知らせない樣にはかるから、名士の妻でも、入夫させて、貞操を破らすのを別に怪しまない。德川家康も、その一族のうちに死んだものがあると、直くにその弟に命じ、兄の妻をめとらせて、やがてその名跡を繼がした事もある位である。しかるに甲州に武勇の聞えある初鹿野傳右衛門が子に源五郎と云ふ者があつて、武藝勇力父に劣らぬ程の腕を持て居たが、後の有名な川中島の戰に遂に討死したのである。武

田信玄は其の忠死を憐み、且つ源五郎父子の名は敵國にも聞えて、大に懼られたものであるから、然るべきものに其名字を名のらせて、その妻に入夫させやうとしたが、もと傳右衛門は、加藤駿河守の二男であつたので、重縁の義を以て、源五郎の從弟にあたる彌五郎を、初鹿野傳右衛門と改め、聽て源五郎の妻に彌五郎を夫にする樣に諭したのである。ところが源五郎の妻は、大に驚き、「吾夫は主君の爲めに忠死をとげたのに、その妻たるものが節義をわすれて、何うして二度他人の妻となられませう、思ひもよらぬ事であります、もしおし立て仰せられるなら、刄に伏して死んで仕舞います」と申切つたので、信玄は大に怒り、「我は傳右衛門の武勇を愛して、その姓名を絶つまいと思へばこそ、かく入夫もすゝめるのである。しかるを何ぞや强情を申したて、にくい奴である。その義ならば潔よく自殺せよ」といつた。信玄の夫人は三條殿の息女であつたが、この事を聞いて、「貞女は二夫に見えずといふ事は、正しい人道であるが、近ごろの世には、それを知るものが少い、源五郎の

妻の如きは、昔の烈女にも耻ないものといふべきである。何うして見殺にさせてならう」とて、信玄入道にさま〴〵申なだめ、遂に自分の手元に召して養つたといふ事である。人情浮薄な今の世の婦女は、これを以て模範とすべきである。

松平光政の室

松平新太郎光政の室は、中務大輔本多忠利の女であつたが、容貌も麗はしく、志も亦優しく、貞順で能く婦道を守つたので、家中少しも風波が起つたことはなかつた。夫婦の間には、一人の男子と二三人の女子があつたが、夫人は平素女兒を訓へていふには、「總て女は女らしくなくてはならぬ。何事も柔順しく。自分で自分の心を制して、男に優らうと思ふてはならぬ。恒に夫を大切にして、決して粗略にしてはならぬ。古の聖人も夫婦はたゞ一世の縁てないといはれた。それで其の最初に能く撰んで、一度吾夫と定めた以上は、身を慎み節を守り、夫の身の幸ひを祈つ

て、苟にも夫の心に背いてはならぬ。そのうへ夫は外を治め、女は内を治むと云ふことがあるから、家内のことは些少のことまでも、能く注意をして、人の妻たる道に背いてはならぬ。又嫉妬は婦女の最も慎むべき事である。ゆめ〳〵これを忘れてはならぬ。夫に若し過失があつたら、氣にさわらぬ樣靜かに之を諫めなければならぬあら〳〵しく云ふのは、極めて賤しい所爲である。又富と貧とは、身の貴賤に拘はるものでないから、平生能くたしなんで、富裕であるからとて決して驕奢に流れてはならぬ。「夫の官祿に從つて、その程をはかり守れ」とは、紫女の名言である。能く女の道を守り、自分が夫に賤しめられてはならぬ」と訓戒したといふことである。それであるから松平の兒女は成長してから、能く夫に仕へて、何れも皆美名があつたといふ。

王醜々自焚して辱を免かる

王醜々は元の闘文興の妻である。陳吊の賊が反いて文興を殺した時、王醜々も亦賊の爲めに掠められて、今や辱に遇はんとした。其の時に、王氏は賊を紿いていふには、「姑く俟てよ、妾が夫の屍を葬つて、それから汝等の命に從はう」とて、やがて自身に薪を集めて火葬しながら、賊の油斷を見濟し、行成烈火の中に飛び込んで燒死んだので、賊は呆氣に取られて、其の儘に止めたといふことである。貞烈の婦とは王醜々の如きをいふのであらう。

義經と眞女

源義經が、元曆元年二月三日、三草山の戰に、案内者を求めたとき、土地の人は皆逃げて居なかつたが、一人の婦人が逃げ遲れて、二人の稚子を負ひ抱へ、山路を越えて走つて行くうちに、先陣の兵卒が近づいたのにびつくりして、抱いて居つた兒童を捨てゝ、一生懸命に走つたのである。義經は其の兒を見附け、「今汝を捨

て、走つた婦人は誰か」と問へば、稚子は泣く〳〵「我が母てある」と答へた。義經は不思議に思ふて、早速彼の婦人を追捕させ、「汝が背中に負ふて居る兒は兄て、捨てた子は弟であらう、同じ兄弟の子を持ちながら、何うして同じ樣に可愛がらぬか、弟の方は幼いから兄よりも却て不憐てはないか」と、尋ぬると、婦人は涙を流して答へるには、「いかにも御不審は尤もてありますが、捨てたのは妾の實子て、連れて逃げたのは義利ある兄の子てあります。妾が子は又も持たれませうが、父母に孤れて便りない此の甥を捨てるに忍びませぬので、可哀相には思ひましたが、弟を捨て、逃げたのてあります」といつたので、義經は感涙を催ほし、重ねて其の素性を問へば、鷲尾三郎常春の妹てあると云ふので、痛く其の貞烈に感じ、劬つて宿所へ送り、鷲尾を呼び出して、案内を賴み、且ついふには、「昔齊の大將が、魯の國を攻めるとき、貞烈な婦人に逢つて、爲めに戰はずして歸つたといふことを聞いたが近來、無道の平家の者に似ぬ、汝が妹の志は、實に魯の國の婦人に勝つた振舞てある。て義經も軍を止めたいが、勅命と云ひ、兄賴朝の下知てあるから詮方はないのてある。また貞女に賞與を贈りたいが、只今與へる一物もない。しかし賞與を贈らなくては氣がすまぬ」とて、鎧一領と太刀一腰を與へたといふことてある。

三宅尚齋の妻

三宅尚齋が獄屋に繫がれるとき、其の妻に母親と二人の小供を委托し、黄金二十兩を渡して、養育の費用にするやうに言ひ置いた。後で妻の思ふには、「良人は獄屋の中で、言ふにいはれぬ辛酸を嘗めて居られるのであるから、其の妻子たるものが安然として暖衣飽食するといふは、甚だ不貞なことである」といふものて、その後は、嚴寒肌を烈く冬の日も溫袍を着けず、蚊虻雲の如く襲ふ夏の夜も蚊帳を釣らず暇さへあれば人の裁縫又は洗濯などして、それて奉養したので、三年の間に、尚齋が渡した二十圓の金は毫も使はなかつたのてある。それから三年經て、尚齋は赦さ

れて家に歸つたので、其の金を出して還すと、尙齋は怒つて、「其の金が今日迄其の儘であるやうでは、きつと母子に對して奉養が缺けたであらう」といふと。妻は、留主中は斯樣にして、姑を養いましたと事情をつげ、且つ「此の金を使はなかつたのは、良人が出獄なさつてからの御用に備へやうと思ふて、それで其の儘今日迄保存して置いたのであります」と答へたので、尙齋は大に其の貞烈な精神に感歎したといふことである。

木村重成の妻

人が死を決して書置きをするときは、眞情を披歴して書くものであるから、千載の後に至つても、讀む者をして凄然涙の袖をしぼらしむるのであるが、彼の木村長門守の夫人眞野氏が良人の決死を悟つて、之を勵ますために、自刄した時の書置きは、實に凄絶なものである。

一樹の蔭一河の流れ、是他生の緣と承はり候にこそ。そもおとゝせの比よりして偖老の枕をなして、只影の形に添ふがごとく、思ひ參らせ候、此頃承り候へば此世限りの御催のよし、かげながら嬉しくまゐらせ候。唐の項王とやらむは世に猛き武士なれど、虞氏の爲に名殘を惜み、木曾義仲は松殿の局に別れを歎くとやら。されば世に望み鶚めたる妾が身にては、せめて御身御存生の中に最期を致し、死出の途とやらむにて奉待上候。必々秀頼公多年海山の御鴻恩、御忘却なき樣顔上まゐらせ候。あら〳〵めて度かしく。

妻より

此の一篇の書置きを讀むものは、夫人が如何に忠節の念に深かつたか、感ぜざるものはないであらう。此の烈婦は眞野豊後守の娘で、大阪第一の美人と稱せられ、當年十八歳の花の盛りであつたといふことである。

ヂスレリー夫人の內助

ビーコンスフヒールド侯ヂスレリーが、匹夫より起つて、遂に英國の總理大臣となつたのは、勿論、侯が秀才の人物であつたからでもあるが、亦其の夫人の內助に由ることも甚だ多いのである。氏が演說する時は、傍聽席に居る夫人の眼光に射られて勵まされ、又政略を考へる時は、鋭敏なる夫人の注意によつて立案したので、近世英國の大政治家は、過半夫人の內助によつて總理大臣の椅子を占めたのである。それゆゑ英國女皇陛下が、金冠を氏に授けて子爵に擧げる時も、氏は辭退して、「臣が今日あるは臣の功でなく妻の功でありますから、どうか妻に授けて下ださい」といつた。それでヂスレリー夫人は子爵夫人となり、其の良人は依然として一個の國會議員であつた。ヂスレリーは妻に後れて死んだが、當時、政敵たるグラットストーンは氏が勳功を顯揚して、之を國葬にしようとしたが、遺族は遺言に違ふからと

云ふて斷つた。その遺言は、「我を、亡き妻の墓の傍に、亡き妻を葬つた時のやうにして葬れよ」といふのである。無論夫人を葬つたのは國葬でなかつたので、此の大政治家の遺骸は、略式の儘で葬られたのである。ヂ氏が夫人を思ふことは斯樣に厚く、亦夫人が良人を助けたことの甚だ大なるをも知るべきである。

コロンブスと夫人

亞米利加大陸の發見者として、芳名を宇內に輝したるコロンブスは、固より彼れが非凡の人物であることは勿論であるが、其の夫人の內助の功が亦實に多大であつたのである。西曆千四百七十年の頃、コロンブスがリスボンに住んで居た時、有名な航海者の娘フエリバを娶つたのである。フエリバは彼れが父に隨つて大洋若くは遠島に航海したことも少なくなかつた。殊に美術的の趣味があつたので、航海の地圖を畫いたり、或は航海日誌を認めたことも多かつたのである。でフエリバはコロ

ンブスに嫁してから、父が遺した圖書の類を悉く良人に與へ、そのうへ父から受けた航海事業の嗜好を話したりなどして、大に其志を勵ましたのである。夫婦がポルトサイドに靜な生活を營んだ時、フエリバは明け暮れ良人の爲めに書物を讀み、父が多年經驗した航海術を話して、遂にコロンブスをして其の目的の爲めに非常な勇氣を起さしめたのである。コロンブスが彼の壯大な事業を企てた折など、世人より大に嘲られたが、獨り彼れに同情を表したのは、フエリバであつた。西班牙のイサベラ女王が寶玉を賣つて、コロンブスの爲めに巨船を購つたときも、獨り彼れの爲めに成功を祈つた者はフエリバであつた。然るに人生無常、月にむら雲花に風、此の憐むべきフエリバは遂に良夫の成功を聞かず、幾夜か西海の空を眺め明かし、其の喜ぶべき大陸發見の音信を聞かないうちに、病に罹つて永眠したといふことである。

仁慈

吾々は、此の世に生れて、名自其の存在と幸福をのみ計つて居れば、それで好い樣に思はれるが、決して左樣出來ないのである。それは何故かと云ふに、吾人は此の社會から孤立することが出來ないからである。換言すれば、社會を離れて、單獨な生活を爲し得られないからである。

社會といふものは、固より個人が集つて出來たものであるが、併し石礫が集つて河原ができて居る樣に、單に集つた丈けのものではなく、そこには切つて斷られぬ利害の關係といふものがあつて、吾と人と互に相扶け相愛しみて、相互の幸福を計らなければならぬ自然の道理があるのである。

人と交際するにも、吾から叮嚀の辭を以てすれば、他人も亦親切を以て交はるものである。此の通り、萬事萬端の上に、仁慈の心を運んで行くならば、「仁者に敵な

し」如何なる人に對しても、怨みもなければ憎みもなく、猜疑の念も恐怖の感も起らず、胸中坦々として、世界を廣く渡ることが出來る。

人は自利のみで幸福な生活は得られない。衣食住一として不足のない身分であつても、仁慈の心のない人には人が懷づくものでなく、黄金の力で、一時人を使役することは出來やうが、決して人に心服させる事は出來ない。又一朝逆境に遭つて疾病にかゝるとか、怪我を受けるとか、又は成功と思ふた企計が失敗に歸したとか種々な不幸が打ち續いたゝめに貧苦に陷つたとかしたときに、誰も同情を以て救濟して呉れるものはなく、一生を煩悶懊惱の裡に終らなければならぬことになるのである。

孟子は四端の說を立てゝ、人は生れながらにして、仁義の心を具へて居るものであるといつたが、なるほど人間に仁愛心のないものはなく、强慾非道の盜賊にも、尙一滴の涙はあるのであるけれども、利慾の雲に鎖されて、此の美しい生得の仁心

を暗まして居るのである。恰も皎々たる明月が、黑雲に包まれて、其の光を放たないのと同じことである。

されば人欲の私を去り、我見我欲の念を離れて、强者は弱者を扶け、賢者は愚者を敎へ、富める者は貧しき者を助け、開明の國は野蠻の國を導き、天より與へたる仁慈の美德を發揮することに勤めなければならぬ。さすれば其の仁惠を受けた者は云ふに及ばず、其の之を施した吾が心內は、無限の喜悅を以て充たされるのである。此の喜悅は萬兩の黃金を以てするも、尙且つ買ひ得ざる永久の珍寶である。

けれども此に一つの注意を要するは、受惠者の地位と能力である。仁惠を施すは固より善道なれど、其の人の地位と能力を精察せなければ、折角の仁惠も其の人の爲とならず、却て有害となる恐れがある。例せば貧困者に物を施すにしても、實際其の人が貧困者なるか、又獨立して生活し得る能力なきか否やを吟味せずに、猥りに物を惠むときは、其の人を益々懶惰者たらしむるに至るのである。故に此の點は

能く注意せなければならぬ。

要するに、天地は生物を以て心として居るので、吾人は其の理を受けて生れたものである。ゆゑに天地の心を以て心とし、此の心を擴充して事物に及ぼすを、仁慈の道とするのである。人たるものが苟にも此の心を失つて、利の爲めに呑噬角鬪を事としたならば、自己も幸福なる生活を遂ぐる事が出來ず、社會も亦決して平和に治まるものではない。

清正士卒の生命を重んず

一日、加藤清正が海を渡らうとするとき、忽ち大風に遇つて、船も覆沒せんとしたので、船長が、「これは海の神が祟をするのである。若し人を海に投げ入れて、神樣に祈つたら、此の災難は免れるであらう」と訴へると。清正毅然と色を正して曰ふには、「人間の生命は至つて貴重なもので、貴賤貧富の別はないのである。苟にも

同情ある人間であつたら、他人を殺して、自分が生きやうと云ふ樣なことは、爲すに忍びられるものでない。しかし是非にと云ふならば、汝輩に指命するであらう」と。そこで水手も奮勵して船を漕いだが、稍々あつて風は止み波も靜まつて、船中の兵卒も悉く無事を得たと云ふことである。

眞田信之と鳥籠

信州松代の城主、眞田伊豆守信之は、幼い時から學問が好きで、晝夜書見にばかり耽つたので、侍臣の者どもは、萬一幼君に病氣が起てはならぬと心配し、或る日一人の侍臣が御前に罷り出て、慰みの爲めに、飼鳥をせられる樣にお勸めすると、信之は早速承知せられたので、作事奉行を召し、鳥籠の調進を命じた。かくて四五日たつと、高さ七尺、長さ九尺、幅六尺の鳥籠が、立派に出來たので、其を信之の前に呈すると、信之は侍臣に向つて、「是れで宜しいか」と問はれるので、侍臣は奇

異な問てあるとは思つたが、主君のことてあるから、「結構に出來ました」と答へると。信之は再び、「其の方の氣に叶へば予も滿足である」といはれた。そこで侍臣は「此の籠の中に飼ふ小鳥を、早速買上げん」と申したが、信之は、「暫時小鳥を買ふことは見合したがよい」といはれた。さて信之は右の侍臣に對し、「明日の晝食の料理獻立を調進して來よ」と命ぜられ、侍臣は料理の事に慣れてをりませぬからとて再三お斷り申し上げたが、嚴命の事であるから何うすることも出來ないて、遂に獻立書を調へて信之に呈した。すると信之は問ふて、「此の獻立は其の方の意に適するか」といはれたので、侍臣は、「仰せの通り、臣の意に適してをります」とお答へすると。信之は又た、「其の方の意に適すれば、予も亦滿足である」といはれた。かくて翌日の午の時になると、信之は料理人に命じて、昨日侍臣から差し出した獻立通りの料理を二人前こしらへさせ、先きの侍臣を召されて、「其の方の發意て作つた鳥籠であるから、其の方は先づ其の中に這入つて、樣子を見よ」と命ぜられたので、

侍臣は其の籠の中に這入つた。信之は又他の從者に命じて烟草盆を籠の中へ入れさせ。籠の中の侍臣に對つては、「其の中で喫烟し且つ話をせよ」と命ぜられるので、命令通り侍臣は行つて居ると、やがて料理人が、二人前の馳走を運んで來たので、信之は命じて、一膳は自分の前に据へさせ、一膳は籠の中に入れさせ。そして籠の中の侍臣に、「其の方は其の籠の中で、其の料理を喰へば、定めて味が佳いてあらう」といはれるので、侍臣は百方お詫を申上げたが許されないから、已むを得ず、籠の中で晝食を終へ、茶果を賜はり、二三時間も話をしたが。信之は彼れを籠の中から出される樣子がないので、侍臣は大に閉口をし、出籠の命令を請ふたが、信之は斷じて許さず、「汝は籠の中て一生を終はるがよい、汝が喰ひたいと思ふものは、望みに任せて、何んでも差し入れてやる。汝が予に仕へる以上は、何も奉公てある。籠の中に居つて、予が慰みとなるのもよいてはないか」といはれたので、侍臣は大に悲み、泣いて憐みを請ふた。信之はまた、「汝は苦しいか」と問はれると、侍臣は、

「非常に苦しう御座ります」とお答へした。すると信之は、「汝が左程苦しかつたら籠を出るがよい、汝を苦しめて樂むと云ふことは、予が好ないのである」といはれたので、侍臣は大に喜んで、早速籠から出た。そこで信之は家臣一同を集め、先きの侍臣を前に坐はらせ、說諭していはれるには、「汝試みに考へて見よ、汝が平素居る室は、十疊敷より廣くはあるまい、此の鳥籠の內は、狹いとは云ふものゝ、それでも三疊敷はある。然るに汝は僅か二三時間其の中に居つたばかりで、非常に苦しいと云ふが、彼の鳥類は天地の間を家とし、自由に空中を飛びまはつて、心のままに食物を求めてゐるものである。其を若し狹隘苦しい籠の中に閉ぢ込めたら、其の苦さは汝の苦さ位の話ではない。況して籠の中に閉ぢ込めた鳥類には、飼主がいくら心を盡して、食物を遣つても、彼れが心に適ふか何うかわからぬ。けれども汝を籠の中に閉ぢ込むと、いつも汝の好きな食物を與へ、且つ汝に何等の仕業も執らさず、また大小便のときは籠の外に出ることを許すのであるが、それても汝は苦しい

といふてはないか、自分が苦しいと思ひながら、如何に鳥類だとて、彼れを苦しめて、自分の慰みとするには忍びられまい。が、しかし斯樣に云つたからとて、汝は決して予を恨みてはならぬ。此の節は、上下を通して、飼鳥の風が流行してゐるから、それで汝も飼鳥の惡いといふ事に氣付かずして、予に勸めたのであらう。予が若しも、汝が勸めたとき、直ぐに其の勸めを排斥したらよからうと思はれるが、夫れでは將來の功能が甚だ薄いから、餘儀なく汝を籠の中に入れて耻めたのである。凡べて人の心は變り易いものであるから、予が今日は飼鳥を惡事と思ふても、後日また飼鳥をしたいと云ふ心が起らぬともいへぬ。けれども今日一たび汝を耻しめた以上は、今後決して飼鳥をしようといふ念を起すことはないであらう、又他の臣下の輩も、汝に懲りて、再び飼鳥を勸める者もないであらう。されば今日汝が、予が命に從つて、籠の中に這入つたのは、其の忠義は百の諫言に勝つてをる。そして又上一人の心は卽ち下萬民の心であるから、予が飼鳥を好むと、松代領內の者は、皆

飼鳥を好むであらう、其の冗費と惡事は果して如何であらう。然るに予が汝を籠中に入れて、飼鳥を勸めたのを斥けたといふことが領内に聞えたなら、領内の者は皆な飼鳥の惡事であることを知り、是れまで飼鳥して居つた者も、悉く其の鳥を放つであらう。して見ると、汝が籠の中に這入つた事は、一人て善事を萬人に敎へたものである。汝は、今後予に惡事があつたら、遠慮なく諫言するがよい。併し、今日の事て予を恨むではならぬ。予は汝を以て、非常の忠臣と思ふのてある」と懇々說諭をせられ、賞典として若干の金子を、右の侍臣に賜はつたので、侍臣は且つ耻ぢ且つ喜び、一同の家臣は皆な其の仁政に感じたといふことてある。而も當時信之は僅か十五歲の少年であつたといふ。

市尹ドラマンド

ジョン、ドラマンドは十八世紀の中頃、エヂンボルフの市役をつとめ、慈善家を

以て世に知られた人てある。ある日、エヂンボルフへ行かうと思ふて、ウエスト、ポードと云ふ郭外を通つた時、むさくろしい小屋の戸口から、葬儀が出て、墓所の方へ行くのに出會つたので、其の樣子を見ると、誰一人見送る者もなく、乞食と思はれる老人が四人、棺の前後に附いた二本の棒を擔ふてゐるばかりてある。ドラマントはこれはきつと非人の葬儀てあらうと思ひ、棺の側に行つて、老人に向ひ、「この死人は何者かは知らぬが、平生懇意の者もなかつたと見え、葬儀を見送る人もないのは不愍てあるから、我が見送の役を勤めてやらう」と云つて、棺の先きに立つて、墓所の方へ行く程もなく、二人の紳士に出逢つた。この兩人はかねて自分と親しい者てあつたので、此の體を見て大に驚き、其の次第を聞くと、「このあはれな乞食の葬に、一人の見送もないから、我が送葬の役を勤めて居るところてある」といはれ、兩人も心を動かし、「然からば我々も其の列に加はらう」と云ふので棺に從ひ其の先きの途中でも追ひ〳〵に人が殖えて、今は立派な行列となつて、墓所に着い

た。ドラマンドは、「我は圖らずも、此の乞食の見送をしたが、こんなに立派な葬式となつた」と云ひつゝ、自分が葬式の施主となつて、棺を穴に卸し、葬埋の儀式も了つたところで、又彼の老人に、この死人の家内の有様を尋ぬると、難澁至極の老婦が一人ありますとの答へであつた。そこでドラマンドは此の場に居合す人々に向ひ、我々が今日此の場に集つて、此の葬儀を見送つたのは、實に不思議の因縁といふべきである。されば今又其の生殘つた寡婦へも、深切を盡さなくては此の場を去り難い、ともゞにいさゝかづゝの物を施しては如何であらう、若しさうなれば私がよきやうに取計らうといふと、何れも皆な同意して、各自幾分の出金をしたのでドラマンドはそれを彼の寡に與へ、其の後、相當の職に就かせて、世間の厄介とならず、自分で生活するやうに引き立てたといふことである

ヒリップ、シドニー

ヒリップ、シドニーは英國の勇將で、詩歌の道に達し、文武兼ね備へた當時第一流の人物であつた。一千五百八十六年英吉利の軍勢が和蘭を援けて、西班牙と戰爭をしたとき、シドニーは騎兵の隊長となつて出陣したが、敵の砲丸に中つて二度馬を失ひ、三度目に他の馬に乘り替へやうとする一刹那、自分の股を打貫かれたので出血甚だしく、氣絶して陣屋に送られた。都て戰場で疵をした時は、きつと咽が渴いて水を求むる者が多いが、何分混雜する折であるから、容易に水は得られないのである。シドニーも此の手疵を受けて、咽が渴いてゐる樣子なので、僅かばかりの水を持つて來た者があつた。怪我人は大悅びで、之を飲まうとする折柄、又一人の兵卒が重傷を受け、人に扶けられて其の前を通り、羨ましげにシドニーの手に持つてゐる茶碗の水を睨んで行くので、シドニーは其の水を口に付けないで、汝の渴は我よりも一層甚しいであらうと云つて、彼の兵卒に與へたといふ。かくてシドニーは此の手疵からして、三十三歳を一期として、遂に落命したのであるが、唯一杯

の水を兵卒に惠んだ爲めに、彼れが美名は今日に傳はり、後世に至るまでも、世に仁惠の行いがあるかぎりは、シドニーの名の朽ることはないのである。

チタス帝

羅馬のチタス皇帝は、臣下の者に德を施すのを、此の上ない樂みとしてをられたある夜、晝間の事を考へられたが、其の日は、臣下の者へ何の爲筋をもせず、又其の他の人にも、何の惠みもしなかつたことを思ひ出し、待從の人々に振向ひて、「アヽ朕は今日の一日を空しく失つた」といはれたといふことである。吾々も日に三たび吾が身を省みて、つとめて善事を行ふべきてある。

名將カロシユスコ

カロシユスコは和蘭の將軍で、慈悲深い人てあつた。或る時、懇意の僧へ、銘酒

を贈らうとしたとき、召使の下郎に持たせたら、途中の出來心て、盜んて飲むかもわからぬと思ふて、セルトナーといふ少年を賴んで、自分の乘馬に騎らせて、之を贈らせた。少年は使の用を了へ、歸宅して云ふには、「この後、馬を貸して下さるなら、貴君の財袋をも共に貸して下さい、そうでなかつたら此の馬には二度と乘りませぬ」と云つたので、それは何故てあるかと尋ねると、「この馬に乘つて走る途中て乞食が帽子を脫いて施與を求むると、其の度毎に、馬は立ち止つて其處を動かず、何でも少し物をやらない間は、一歩も前に進まない、今日は生憎錢の持合せがなかつたので、止むを得す、何か乞食へ與へた眞似をして馬をだまし、やつと其の場を拔きました」と答へた。これはカロシユスコが平生馬に乘つて、乞食に物を施したのて、馬も其の習慣となつて居るのてある。これを以て見ても、カロシユスコがいかに仁心に富んて居たかゞ想像されるのてある。

アルフオンソ王

シヽリー、ネープルス（伊太利）の二州を領せられた、アルフオンソ王は、謙遜で且つ臣民を愛せらるゝ聞が高かつたが、嘗てシヽリーの役に、敵から路を防がれ軍勢は河の岸に止つて、終日食を得なかつたが、日の暮るゝ頃、一人の兵士が、麭と乾酪の一片に蘿蔔を添へて、王の御前に持つて來た。斯る時には、何よりの珍味と思はれそうだのに、王は其の志を厚く謝せられて、斯く多勢の軍卒が、飢を忍び勇を奮つてゐるのに、予一人どうして之を受けられやうとて、辭はられた。

又ある時、キヤンパニヤと云ふ處を微行せられた時、一匹の驢馬が、泥の中に陷り、馬丁は一生懸命の力で救はふとあせつたが力及ばす、通行の人々に助を乞ふたが、誰も顧る者がなかつたので、馬丁は王であることには氣が附かず、助を乞ふと直ちに馬から下りて、馬丁と力を合せて、難なく驢馬を路の上に引き上げられた。

後に馬丁は王であつたことを知り、地上に附して無禮を謝すると、王はいや〳〵少しも無禮ではないといはれた。是れよりして、以前臣民の中に、王に對して敵意を挾んで居たものも、遂に其の仁德に服したと云ふことである。

リンコルンの涙

米國に於ける南北戰爭の最中に、一人の兵卒が軍律を犯して、死刑に處せられんとしたので、その妻は悲歎に堪へず、如何にもして夫を救はうと、殆ど狂氣のやうになり、赤子を抱いて、大統領リンコルンの館前に至り、哀を乞はうと思つたが、當時は公私の用務が繁く、大統領の面謁を請ふものが、日夜門前に市をなしたので三日三夜立續けたが、更に間を得ない。そして一方には、夫の死刑も愈々迫つて來るので、心はいよ〳〵あせるから、四日目の夜になつて、案内も待たず、窃に戸を開けて館内に入り、或る一室に控へた。リンコルンは其れとは知らず、劇務の疲を

慰めるため、暫時庭園を逍遙せんと、廊下を傳ふて出て來ると、呱々と乳兒の啼く聲がするので、不審の餘り、僕を呼んで何物であるかと尋ねさせると、かく〳〵の次第であると、哀訴の件を聞いたので、慈愛の念制することが出來ず、遂に自分で筆を取り、赦免狀を認めて、之に與へられたが、涙痕斑々と紙面に點じ、滿幅皆濕はうて居たといふことである。

趙盾一飯の恩

趙盾が以前晉の太夫であつた時、或る日、郊外に出遊する途すがら、一人の饑人を見たので、不愍に堪へず、持合した辨當を與へて、汝は誰人かと問ふと、「私は齊の國の靈輙といふ者であります。三年間遊學して、今歸らうと思ひますが、何分旅費が盡きて食事をすることも出來ませぬ」と答へたので、趙盾はます〳〵之を憫んで、更に食を與へると、靈輙は大に喜び、歸つてから靈公の守門の甲士と爲つたの

てある。その後、趙盾は或る事情からして、靈公と爭ひを始め、靈公は非常に立腹して、趙盾を殺さうとしたのであるが、そのとき靈輙は守門の役をつとめて居るのを幸ひに、趙盾が乘つて居る車を扶けて、やつと其の難を免れたので、趙盾は大に喜び、深く其の恩を感謝すると、靈輙が答へていふには、「我は以前貴公に扶けられた饑人であります。彼の時、貴公から食を惠まれ、此の一命が扶かつて、斯樣に守門の役をつとめて居るのであります。それゆえ本日は聊か其の舊恩に報いたので、別に貴公の感謝を受ける譯はありませぬ」と。

那波活所

紀州侯は勇武絕倫の人であつたが、其の佩刀の利鈍を試めすには必ず人を以てせられたのである。或る時、侯は一口の名刀を得られた、其れは備前光長の鍛錬したものである。そこで例の如く罪人を執へて之を斬られた、左右の者共は、其の名刀

と且つ侯の手際の立派なことを稱讃し措かなんだが、活所は獨り額を蹙めて默つて居るので、侯は、「支那でも斯樣な利刀と又刀を執るに妙を得たものがあるか」と大に自慢して問はれると、活所は、「さよう支那でも龍泉大阿干將莫邪の如きは、有名な刀で、水陸で蛟犀虎兒を截斷し、其の利は之に讓らん程であります。又人君で人を斬殺して快としたものもあります、後の殷の紂王や夏の桀王の輩は是れであります。吾邦にも職業として罪人を斬る者もあります、是れは穢多と云つて至つて卑しいものであります」、と申し上げた。侯は暫く默思して居られたが、やゝあつて曰はれるには、「其の方の言ふことは甚だ道理である。是れまで吾は何うしてこれに氣附かなかつたであらうか」と、大に自ら省み、厚く褒賜せられたといふことである。

中納言治貞夜番をなす

紀伊中納言治貞が、一夜、寢所を出て、獨り藩邸を巡視し、夜番の者が破れた衣

服を着け、跣足で、拍子木を戛々と擊つて夜警してゐるのを見て、「汝は暫く休憩するがよからう」といはれると、夜番は主君であることを知らないものであるから、辭退して、「夜警には法があつて、若し違ふと罪に處せられます」と答へると。治貞がいはれるには、「吾は充分其の法を存じてゐる。汝は心配するに及ばぬ」と、遂に拍子木を擊つて、大に夜警を呼び、底内を一週したのである。それから明日になつて、國老を呼んで曰はれるには、「夜番の者は、風雨霜雪を冒して勤仕を怠らない、其の勞眞に憫むべきである。これから恩惠を加へて遣らう」と、毎月二百文を增加されたと云ふことである。

廉潔

古人の言に「渴しても盜泉の水を飲まず」といふてあるが、此語は最も簡明に、最も適切に、廉潔の意味をいひあらはしてある。

凡て、人間といふものは、誰れしも富貴を望まぬ者はない。人よりも多く財産を持ち、人よりも貴い地位を得て、幸福な生活を遂げたいと云ふのが、一般の人情である。けれども情欲は猛烈なる火の如きもので、放任して置くときは、遂に自他の人命をも燒くので、實に恐ろしいものである。それであるから理性の水を以て、此恐るべき情欲の火の勢力を防禦して行かねばならぬ。

いかに金が欲しいからとて、他人の倉庫に穴を明けてはならぬ。いかに貴い位が得たいからとて、他人の椅子を奪取つてはならぬ。と云ふ樣に、道義の觀念を以て、自己の精神及行爲を律して行くのである。かくすれば如何なる榮利の境に出會ふても、決して誘惑に溺れるといふことはない、是れが卽ち廉潔の德である。

廉潔とは、清廉潔白と熟字して、吾人の精神が、清水のやうに、奇麗なのを云ふのである。精神の奇麗なのとは、貪欲の心を起さぬので、爲すべからざることを爲し、取るべからざるものを取るといふ如き、我欲私心を離れるのである。しかすれ

ば自己は縱し貧賤洗ふが如き境にありても、精心の中は、常に清朗明徹、仰いで天に慚ぢず、俯して地に愧ぢず、毫も疚しいところはないのであるから、不義にして巨萬の富を得て居るものよりも、無道にして高貴の位を得て居るものよりも、遙かに精神上の悅樂と滿足とを得て居るのである。既に精神上の悅樂と滿足とを得れば富何物ぞ、畢竟浮雲の如きものである。

古來、我國には武士道なるものがある。武士道には、忠義、孝行、節操、勇武、仁愛、禮讓等の幾多の要素があるが、廉潔も亦是等の要素と相並んで、我國民の一大精神となつて居るのである。此精神あればこそ、東洋の君子國として、一段の品位を高むることが出來るので、苟も此道德を無視し、貪欲の心を逞ふしたならば義を傷り、道を害ひ、子としては親に不幸となり、臣としては君に不忠となり、武士道の精神は地に墮ちて、汚名を千載に遺すことになるのである。

されば我國民は、此廉潔の德を養ひ、身を富貴功名の外に脫して、精神上の悅樂

と滿足とを得ることに務めなければならぬ。

天野康景

天野康景は、德川氏に仕へて、一萬石の祿を受け、興國寺の城に居つたのであるが、或る時、一室を建築しようと思ふて、澤山材木を集めて、準備をして居ると、連りに其の竹木を盗む者があるので、兵卒に言ひ付けて夜番をさせた。すると或る晩の事、案の如く、一群の盗人が遣つて來たので、守卒は刀を揮つて、彼等を逐ひかけ、一人に負傷をさせた。此の盗人は德川氏の邑民であつたか、負傷者は代官に訴えて、「天野氏の兵卒と喧嘩して、斯樣に負傷致しましたから、何分宜しく處罰をして下さるやうに」と申し出したので、代官を勸めて居る井出甚介は、直ぐに人を康景の處へ遣つて、「擅に公邑の民を傷ふといふのは、實に承知ならぬ振舞である早速犯者を出す樣に」といふてやると、康景は之に對して、「盗人を見て之を殺すの

は定例であつて、別に不思議なことはない。彼の輩は頻りに我の竹木を盗みに來たが、我が彼の輩を手にかけて誅することが出來なかつたのは實に恨事である。で兵卒は我が命令を受けて、夜番をして居たのであるが、盗人が來たので、之を撃退したのは、當然のことで決して罪はない、それゆゑ犯人は遣ることがならぬ」と返事をしたので、傷者は遂に之を家康に訴へた。そこで康景と甚介とを呼んで、事の次第を尋ねると、皆前に言つた通りを主張して、何れとも決しなかつたから、家康は心の中で、康景は僞を言ふ樣な人物ではない、僞は或は訴へた者に在るてあらうと思ふて、命令して其の訴訟を罷めさせ、本多正純を康景のところへ遣つて、內々事の顚末を探らせた。で本多は、康景のところへ行つて、「兎に角、彼の訴者は公邑の民であつて、貴殿の兵卒は私の人間である。私の義を押立てゝ、公威を害するといふことは甚だよくないことではないか」といふと、康景は、「とたへ公の事に關しても、正直を枉げて、曲つた道につくと云ふことは、私には到底出來ない、又我が兵

卒は賤しいけれども、決して罪のあるものでない。で狂げて彼の兵卒を殺すよりかいつそ我が死んだ方がよい」といつて、遂に城邑を棄てゝ出て往つたといふことである。實に潔白な精神ではないか。

賴春水の廉潔

賴春水といふ人は、何事にても勤勉であつて、文人疎慵の風習はなかつた。家内を治むるにも、器什をきちんと片付け、帳簿なども明晰にして、無用の故紙でも綺麗に整へて決して棄てず、儉素を主として、些細な事も苟にするといふことはなかつたのであるが、此等儉約家が往々にして陷り易い吝嗇といふ弊は寸毫もなく、つとめて故舊を撫し、貧困者を恤んだのである。氏が死ぬる二三年前のことであつたが、或る門人に手紙を出して、「我が亡後にこれを披げ」とあつたので、後になつて披いて見れば、具さに死後の事を處分してあつた。「二本の刀と一本の槍は家の舊物

てある。藏書は我が若いときから辨じておいたもので、我が膏血であるから、子孫たるものはこれを愛護せなければならぬ、他の物は惜むところはない。又廉潔の二字は我が家の精神である。吾が死んだ後、眷族の者で汚名を得ると、卽ち祖德を汚すのである。この外には別に心配することはない。また某の物を借りたのは返し、買つたものは値を拂はなければならぬ」と、細かに記して洩す所はなかつたといふ。

橘良基

橘良基といふ人は、五州に歷任して、治績もあり、功勞も一通りでなかつたのであるが、職を辭して歸つて來る度毎に、少許の資糧をも持つて來なかつた。そして常に子孫に向つて、人間といふものは自分の行を潔白にせなければならぬと敎へたのである。或る時のことであつたが、子の在公が、國を治むるには如何樣にしたらよいかと、其の術を尋ねると、良基は答へて、「さよう治國の術には種々あるが、清

潔と云ふことが、何より大切である」といつたといふことである。その位良基は潔白な者であつたから、死んでも、別に家に貯蓄はなく、中納言在原行平が、絹布を贈つたので、やつと葬式をしたといふことである。

紀夏井

紀夏井が讃岐の守と爲つたとき、國中は能く治つて、官吏も人民も、皆其の德に歸服をして、誰一人欺く者はなかつた程であつたので、任期になつて、歸つて來るときにも、百姓共が官邸に來て、頻りに留任を乞ふので、更にまた二ヶ年程留ることとなつた。其の間、夏井の施政がよかつたものであるから、人民は富み、倉庫は實つると云ふ按排になつたので、其の部内に四十棟の大藏を造り、其處へ糧を納めて、不動の貯蓄をさしたのである。それ程であるから任期になつて歸へるときに、吏民から澤山の贈物をしたが、一も受けないで、都に歸つてから、其の家に贈物を

届けたが、夏井は唯紙筆丈を受けて、其の餘の品は殘らず還へしたといふことである。

許衡と梨

元の許衡が、或る時暑中に、河南を過ぎた時、あまり咽喉が渴くので、大勢の者は路傍の梨を取つて喰ふたが、許衡は獨り樹の下で休息して居るので、或人が、「なぜ梨を喰はないかと尋ねると、許衡は、自分の所有でないものを取つて喰ふのは不可ない」といつた。そこで或人は、今世の中は亂れて居て、此の樹は誰の者やら主は無いから、差支ないではないか」といふと。許衡は、「決して左樣でない、よし梨の樹には主人がなくても、吾が心にちやんと主人があるから、良心に滿足をしないものは、塵一つも取ることはならぬ」と答へた。許衡の家は貧乏であつたが粟の出來るときには、粟を食べるし、其れが出來ないときには野菜を食べて居て、少しも

不平の色なく、泰然として生活をしたのてある。そして少しても餘財があると、親族の者を始め、世の貧書生に分つと云ふ風で、人から物を遣つても、義に違へば決して受けなかつたと云ふことてある。

禮　讓

昔或る處に、二疋の羊が居つて、一つの川を渡らうとしたが、其の川水は、華嚴の瀧の樣に、何十丈あるか知れぬと云ふ程高い、斷崖絶壁のところに落ちて居た。そして一つの橋が、其の瀧の上に架けてあつたので、二疋の羊は一時に東西から渡り初めたのである。そこて橋の中程に來ると、ひたりと衝當つて、互に押合つて居るうちに、遂に二疋共、斷崖絶壁の上から、直倒樣に落ちて、あはれにも紛微塵に碎けて死んて始末つたといふ一つの話がある。

此の話は、何てもない事の樣てあるが、能く其の意味を詮索して見ると、實に深

い道理を云ひ表はして居るのてある。それは何てあるかといふに、即ち吾々人類が我欲の念を逞ふして、禮讓といふことを守らないために、遂に共に〳〵不幸なる生涯を送らなければならぬといふ意味が含んで居るのである。

毎度の事てあるが、吾々人類は社會生活即ち協同生活をせなければならぬのである。ところで我意を逞ふして、唯自分一人の欲を充たすことのみを計るといふと、世の中は丸て弱肉强食の修羅場と化して始末つて、實に悲慘極まる生涯を送らなければならぬことになる。それては折角幸福を願ひ平和を祈つても、決して得られる譯のものではない。

眞實幸福なる生活をし、平和なる生涯を送らうと思ふたならば、是非共我欲を棄てゝ、禮讓の德を守らなければならぬ。假令自分に才能もあり、知識もあり、勢力もあつたとしても、其の才能、知識、勢力を恃みとせず、高慢をせず、成る可く社會の人に敬意を拂つて、善事を人に讓るといふ觀念を持たなくてはならぬ。

古賢は、「禮は天理の節文、人事の儀則、讓は卽ち禮の實なり」といつて居られるが、實に其の通りである。禮讓の德を守ればこそ、一家も齊ひ、一國も治り、社會も平和になるのである。若し一日でも此の德がなかつたならば、人々我欲を縱にして、爭鬪犯亂、禽獸と毫も異なることはない。

故に人たるものは、恭敬の念を厚ふし、謙遜の德を守つて、進退動止、須臾も禮讓に離れない樣にせなければならぬ。かくしてこそ始めて天理人道を全ふし、萬物の靈長たるに愧ぢないのである。

南洲禮義を重んず

西鄕南州が蝸殼町に居つた頃、重に十四五歲以下の兒童を集めて、種々趣味のある話をして、訓育をしたので、兒童は毎月數回、時刻を定めて集まつたが、南州はいつも彼等に「カステラ二片づゝを與へ、時としては、午餐の際、例の薩摩汁を烹

て、飯を食べさせたのである。一日、兒童は例の如く、南州の宅に集つて、敎を聞いて居つたが、一人の少年が、隣席の少年に與へた「カステラ」を一片取つて喰ふたので、南州は之を見て、痛く戒めたといふことである。南州は平生至つて禮義を重んじ、殊に少年の輩を敎ゆるには、斯樣な瑣々たる事でも、能く注意せられたものである。

治太夫と清三郎

山內治太夫と進士清三郎は、共に松平康重の臣である。或る時殿戰をして、退くときに山內は亂射して一本の矢もなくなつたが、敵兵山縣源四郎等は、益々急を追ふて來るので、清三郎は一本矢を拔いて、治太夫に投げてやつた。すると治太夫は早速立ち止つて射たところが、其の矢は一兵の胸を貫いて、松の樹に中つたので、敵兵共は、皆恐がつて引き去つて始末つた。山縣源四郎は、其の矢を康重のところ

へ送つて、「貴殿の幕下には、實に能く弓を射るものがある。敵ながら感心仕つた」といつて褒めると、康重は、其の矢に清三郎の姓名が刻んであるのを見て、是れは清三郎に相違ないといつて、なにか褒美を出さうとすると、清三郎は、「其れは拙者ては御座らぬ、治太夫が發したのである」といふので、然らばとて、山内を呼んで問へば、「いや其れは拙者ては御座らぬ、清三郎である」といつて、互に讓り合ふて決しないものであるから、康重は、遂に二人に褒美を與へた。そこで當時の人々は兩人の禮讓の德を稱し、今の孟之反であるといつたといふことである。

藤原良繩

藤原良繩は、性質は寛裕で、至つて忠孝の人であるといふので名高かつた。貞觀は初めに、正四位下左大辨となつたが、是の時に、右大辨の南淵長名と左中辨の大江音人は、良繩より下級に在つたのである。で良繩は、私かに或る人に向つてい

ふには、「南淵と大江の二臣は、碩儒耆宿であるのに、吾よりも下に居られ、吾は二賢よりも齡が少くて而して其の上職に居るので、朝廷に出入する際は平生も汗が流れるのである。彼の左近衛少將藤原基經は、齡は少かつたが、風骨はあり、才望は高く、時の人も其の器を稱へ、先帝も亦其の雅量を重んじて、深く寵愛せられたが今では吾と同じ樣に四位を帶びて居るので、吾がちつとして席に安んずることが出來ない。凡べて、少將四位を帶ぶる者があると、中將職を辭退するといふのが、古來賢者の所作である。吾は古人の如き、行爲がないにしても、其の風儀は常に敬慕して居るのであるから、吾の爲めに、賢者の昇進を塞ぐのは、吾が本意でない」といつて居たが、遂に病氣が重いといふのを口實として、左大辨を辭讓したのである。それから暫くして、長名は左大辨となり、音人は右大辨となり、基經は中將と爲つたが、良繩は右衛門督に遷されたといふことである。虛名私利を拋つて、辭讓の道を全ふしたのは、實に千古の美德といふべきである。

チウリンの英人

十八世紀の中頃までは、英國人が海外に旅行することは甚だ稀れで、今日とは違つて、容易ならぬことであつた。ある一人の英人が、歐羅巴を旅行する途次、伊太利のチウリンに行つた。一日、見物する爲め、市中を散歩して居たが、折しも練兵場から歸つて來る歩兵の一隊に逢つたので、路傍に立つて、過ぎゆく行列を眺めて居るうち、一人の若い士官は、彼の旅人の見物しておるのを見て、身振を作らうとしたのか、わざと市街の中央の溝渠の縁を過ぎたが、誤つて足を躓いたので、溝渠の中へ落ちまいと、身をかへす途端、帽子を墮した。群集の見物人は、之を見て大いに笑ひ、旅人も定めて可笑しく思ふたであらうと、英人の方を見た者もあつたが、案の外、此の英人は顏色もかへず、帽子のころんだ處へ走つて行き、其れを拾つて、當惑してゐる士官に渡すと、士官は其の擧動に驚き、赤面の體で、其れを受

けとり、叮嚀に禮を陳べて、行列に追ひ就かうと急いで走つた。人々は皆な旅人の所作を譽め、互ひに耳語き合ふ間に、彼の旅人も其處を起ち去つた。此の事に就ては、双方の間に、一言の語をも交へなかつたけれども、眞實の親切心から出た、禮儀の擧動であるから、深く人々の感に徹したのである。さて彼の士官は營所に歸つた後、事の次第を隊長へ告げ、言葉を盡して、旅人の所作を譽めたから、隊長も之は捨ておかれぬと、直ちに大將に傳へた。こんなことは露知らぬ英人は、其の夕、旅館に歸つて見ると、一人の陸軍の副將が、本陣からの使者となつて、彼の英人を迎へに來て待つて居た。英人も望外の事であるが、其の好意に任せ、暮方に、當時歐洲第一の華麗な兵營と聞えてゐる、チウリンの本營に行き、大變鄭重な待遇を受けた。是からして英人の評判が高くなつて、チウリンに滯留中、絶えず諸方より招かれて、貴顯の家に行き、出立の時は、伊太利諸州への紹介狀を受けて行つたのでさ程富裕の身でなかつたが、彼の親切なる行からして、當時最も盛な諸州を旅行中

至る處で身分に優つた尊敬を受け、非常に愉快な旅行をしたといふことである。

アイザック、ニウトン

古來、博識英才の學者大先生と云はれ、世間から敬はれ、尊まれる樣な人は、多く尋常の者よりも、よく禮義を知り、却つて人に謙るものである。英國利の有名な理學者アイザック、ニウトンの如きは、所謂大學者であつて、又謙退辭讓の君子といふべき人物である。彼が幼年の時、小學校で樣々の細工物を作つて、見る人は其器用なのに驚かないものはなかつたといふことである。ニウトンはいつも鋸、手斧槌、など色々の道具を持つて居て、其れを使用することも頗る巧みであつた。其の家の近處に風碓場があつたが、彼れは毎日見物に行つて、其の仕掛を詮索し、一々機械の動く樣子も呑込むで家に歸り、自分が持つて居る小刀、鋸、手斧、金槌抔をもつて、小い風碓を造つたが、其の形は近隣の大な風碓と少しも違はず、大變美し

い嬉器であつた。そこで彼れはこれを屋根の上に置いて、風の力で回したり、又小い鼠を風碓の中へ入れて車を回さうと工夫した。其の次第は車の輪の内を箱のやうにし、上の方に小麥、米杯置いて、鼠を此の箱の内に入れると、鼠は其の麥を喰はうとして、上に昇る、すると鼠自身の重さで輪を回はすといふ趣向である。又或る時、友人から古い箱を貰つて、水漏を造つた。水漏は水の點滴で時を計る趣向である。太さは凡そ四尺ばかりであるが、形は尋常のものと異りはない。水漏の頂上に日晷の文字板を置いて、時刻の符號をつけ、指時針は木の片で水の滴るにつれて上り又下るときに動くやうにして自分の室に置いて見るに、精密に時を示して一寸も違はないので、家族の人々も、いつも其の室に來て、時を見るといふ次第、ニウトンが中學校に入つた後も珍重し、保存せられたのである。ニウトンが寄宿した室は鳥、獸、人物、船舶の圖、其の他種々器械畫の形圖を、壁の一面に、木炭で書いてあつた。彼れが中學校に居た時は、專ら空氣、水、潮、日、月、星等の研究に思を

こめてあつたが、一日、庭に立つて居た時、遇々顆の林檎が樹から落ちたのを見て林檎が地に落つるのは、どう云ふ原因であらうか、林檎に落つる力があるであらうか、又地に林檎を引き落す力があるであらうかと、疑問を起した。尤も彼は疾くから此事について、工夫を凝らして居つたのであるが、此の時、始めて林檎の落つるのは、大地に一種の力があつて然るのである。此の引き落す力は、天然の理法であることを發明したのである。萬物が飛び去らないで、依然として地上にあるのは、此の力に引かるゝに由るのであるから、之を引力と稱へ、又萬物に重量があるのも此の力に由るのであるから、之を重力とも稱した。ニウトンは、又萬物は其の大きさも、其の在る場所との距離の割合によつて、各々相互に引き合ふものであるといふ理を發明した。是れに依つて月は一つの大な世界であるが、地球の引力にひかれ行星は太陽の引力にひかれて、はじめて月は月、行星は行星、各々其の存在を保つのであるといふ理が明かになつたので、此の發明によつて、ニウトンの名は忽ち世

界學者の中に轟いたのである。又嘗て太陽の光線は、七色から成立て居る事を發明し、其の他種々の、奇異驚くべき、前代未曾有の發明をしたのである。さてかやうな大學者たるニウトンの人と爲りは何うかと云ふに、性質は極めて溫和で、生涯中殆ど一度も、怒の色を顯はしたことはなかつたといふ。ダイヤモンドといふ名の一匹の犬を愛して飼つて居つたが、ある時、要用があつて、學事をさし置いて、他出した留守に、ダイヤモンドはニウトンの書齋に入つて、種々の紙や、書類の積んである卓の上に飛び回はり、卓上の燭臺を倒したので、忽ち紙に火が移つて、殘らず燒き盡し、ニウトンが多年辛苦したものも、一時に灰煙となつて仕舞つた。やがてニウトンは歸つて書齋に入り、此の狀を見たが、別に怒る氣色もなく、此犬を擊ちもせず、只おゝダイヤモンド、ダイヤモンド、汝は不調法をしたが、其の不調法の譯を知るまいと云つたばかりであつた。ニウトンは賢明博學であつたが、毫も其の學識に誇らず、至つて謙遜で、人に對しては、どんな貧しい者、賤しい者にても、

粗末にするといふことはなく、深切を盡された。固より其の時代では、ニウトンの右に出づる賢明な學者はなかつたけれども、彼れは臨終の時に、自分が知つて居る所は、後世學ぶべき事の多いのに比べると、萬分の一にも當らないと云つた。學を好んで食を忘ると云ふことは、ニウトンの事であらう。彼れは熱心に學事を研究する時は、食事が整つたにもかまはず、三時間も過ぎてから、食卓に就いたことが屢〻であつたといふことである。一千七百二十七年に、八十五歳を一期として、終に黄泉の客となつた。

信義

人は誰れでも立身出世を望まないものはなく、また人たる道を行ふて天晴の者になりたいといふ願を持たないものはないが、併し之を完ふしようと思へば、必ず朋友の輔を須たなければならぬ。

古來英雄と云はれ、豪傑といはれる程の人物には、必ず朋友があつて、互に相輔け合ふたのである。管仲と鮑叔との如き、藤原道眞と、藤原忠平の如き、何れも立派な朋友を持つて、兄弟も啻ならぬ交情を結んで居たのである。

俗諺に、馬は馬伴れ、牛は牛連れといふことがあるが人間と云ふものは、性來朋友を求める情理の具はつて居るもので、婦人は婦人、男子は男子、老人は老人、小供は小供、みな其れ〴〵に友人があつて、共に遊び共に語つて樂しむのである。それであるから親兄弟にさへ咄し難いことも、互ひに打ち明けて相談すると云ふ樣に極めて仲の好いものである。否さうなくてはならぬのである。

ところが實際世間を見渡すに、眞實心から友情を守つて居るものは、至つて少ない、幼少の頃から、竹馬の友たゝンものが、一朝些細な事からして、互に感情を害し、是れまで内密に相談したことも、殘らず暴露して、相互に不幸を招くやうな者が澤山あるのである。是等はつまり朋友と交はるべき道を履まないから、斯樣な醜

態を演ずるのである。

孔子が、仁義禮智信といつて、人間の守るべき五常の德を敎へられたが、其の信義といふのは、專ら朋友と交はるべき道を示されたもので、一旦朋友の約を結んだ以上は、惡事でないかぎり、若し我れの方に不利益な事があつても、其れが爲に、友情を傷はないやうにする。又人間の境遇は、千變萬化で、順逆の定まらないものであるから、順境の時ばかりでなく、逆境に陷るときも、其れが爲めに、友誼を害するやうなことがあつてはならぬ。

友人は兄弟と違つて、直接に親族の關係はないけれども、同氣相求め、同聲相應じて目的を一にし、主義を同ふして居るのであるから、全く異體同心である。異體同心であるから、互に腹心を開いて、忠告善導し、艱難相濟ひ、以て交情を密にし自他の幸福を完ふせなければならぬ。是れが友人の友人たる要義である。

豐臣秀吉

豐臣秀吉は、荒木村重と仲の好い友人であつたが、織田信長が或る者の讒言を信じて、村重を殺さうとしたので、村重は怖れて遂に謀叛をしたが、其の時秀吉は、事の原因は讒言から出たのであるといつて、信長に免しを請ひ、又一方村重のところへ行つて、懇切に其の謀叛を止めさせたのである。ところで村重は其の忠言を納れなかつたが、其の臣の河原林と云ふ者が、秀吉を殺して、信長の勢力を殺がうと申し出た時には、村重は其の臣に向つて「汝が言ふ事は吾の爲めに利を計ることではあるが、しかし秀吉と我とは、斷金の交を結んで居るので、此の度、私に諫言をするのもつまり我が家の亡びんとするのを不愍に思ひ、我に害心のないことを知つてをるからである。夫の鳥でさへ窮して懷に入つて來れば、殺すに忍びないものであるのに、まして朋友の信義を重んじて來たものを殺すと云ふのは、禽獸よりも、

劣つた所存といはなければならぬ」。といつて、遂に秀吉に酒を飲ませ、心持ち能く語り合つて、秀吉の歸るときには、門の外まで送つて出て、與に別を惜んだといふことである。

申顔

宋に申顔と云ふ人があつたが、平生も口僻のやうに、一日でも友人の無可を見なければいかぬといふので、或る人が、其のわけを尋ねると、申顔は、「いや別に變つたこともないが、實はあの無可は能く人の過を責める男であるが、一日彼れを見ないと、吾が過を聞くことが出來ぬので、それで彼れを敬慕するのである」と答へたそれほどであるから兩人の間は、至極睦じく、而も兩人とも貧寒であるので、外出する時にはたつた一枚ある着物を交る〳〵着更へて出たといふことである。

荀巨伯

晉の荀巨伯は、遠方の或る友人が病氣して居るので、態々見舞に往つた。折しも胡賊共が其の郡を攻めて居る時であつたが、巨伯は病人を其の儘にして歸る譯に行かないので親切に介抱して居ると、彼の賊共が遣つて來て、「我が大軍が押寄せて來たので、一郡の者は殘らず逃げて始末つたが、汝は男子であり乍ら、獨り此に止つて居るのは、どうした譯か」と聞くので、巨伯は、「實は友人が病氣に罹つて居るから、之を棄てゝ去るに忍びない。いつそ我が身で友人の命に代る覺悟である」といふと、賊共も彼が信義の厚いのに感心し、軍を止めて還つたといふことである。

回々教徒と西班牙人

數百年以前のことであるが、モロッコ人の回々教徒が、西班牙の一部分を占領し

て居つた時、一人の西班牙人が、回教徒の少年とはげしい喧嘩をして、圖らずも之を打ち殺して、其の場を逃げ、或る園を見出し、幸に追手に見つからないので、壁を越えて園の中に飛び込むと、園の主人は回教徒であつたから、庇つて下さいと賴んだ。一體回教徒は、一度食事を共にした者は、どんな人でも庇ふといふ習慣であつたから、園の主人は、彼の西班牙人に安心させようと、一顆の桃を食べさせ、涼亭の中に閉じ込んで置き、夜になつてから、一層安全の場處に逃げさせてあげようと云ひ置いて、家に歸つて坐はると、同時に、大勢の人が泣きつ叫びつ今西班牙人に殺された、この家の子の死骸を門口から荷込んだ。主人は見るよりびつくりしてこの子を殺した者は、慥かに今我がかくまはうとする西班牙人に相違ないと云ふことを知つたが、一旦約束したことは破るまいと覺悟を定めて、誰れにも此の事を話さないで、夜になつてから、彼の涼亭に行つて、西班牙人を出し、自分の馬に騎らせて、いかに耶蘇教徒よ（西班牙人をさしていふ）今朝卿が手に掛けて殺した相手

の者は我が子である。卿は殺人の罪を決して免るゝことは出來ぬけれども、予と同食した緣故があるから、予は約束の言葉を守らなければならぬ。此の夜の中に早く何れへか逃れ、曉明までに安全な場處へ行かれよ、予は君に對して毛頭復讎の念を持たない。予が信義を守つて失はないのは、天が予を惠み給ふ所である」といつて別を告げたといふことである。

松本順と舊恩人

松本順は近年我が國刀圭家の先輩であるが、氏が學生の時は、學資が乏しいので屢々困窮した。その甚しい時は三度の食事を減ずることもあつたのである。一日のこと、非常に空腹したが、身は一文の貯蓄もないので、どうしたらよからうかと思案の結果、會ま古箱に古足袋があつたので、喜んで、「是れ天の賜なり」といつて直ぐに質屋に持つて行くと、番頭が驚いて、「弊店開業以來斯樣な品物を手にしたこ

とがない。實に珍事である。折角のことであるが、需に應ずることが出來ぬ」と斷つたので、松本氏は大に怒り、「汝の店は一體不都合千萬である。品物の如何に依つて、取捨すると云ふことは、甚だ不公平である」といふと、番頭も亦立腹し、互に口角泡を飛ばして喧嘩をするので、帳場に居つた主人が出て來て、無禮を謝し、「只下の言はれることは尤もである。謹んで貴君の需に應じませう、しかし此の品物はあまりよくないから、價格が少くないが、それでよろしいか」といふと。氏は「價は素より店則に據つてよろしい」と答へた。そこで主人が天保錢一枚を渡すと、氏は大に喜び、早速燒芋を買つて、纔かに飢を充たしたのである。其の後、氏は一意專心業を勵んで、立派な刀圭家となり、松本國手の名が都下に響いた時、一人の老翁が來て診察を請ふた。で松本氏は美しい服を着けて、診察に出ると、其の老人はぎろり〳〵松本氏の顏をながめて、「失禮ですが先生は昔日の古足袋先生ではありませぬか」と尋ねるので、松本氏は「いかにも左樣である」といひ、當時の境遇を回

想して、厚く其の恩を謝し、心を盡して治療し、「聊か是れて舊恩に報いた」といはれたといふことである。

友愛

廣い意味からいへば、天地同根萬物一體で、四海の內皆同胞兄弟ならざるはないから、甲も、乙も、丙も、丁も、知るも、知らぬも、互に親切を盡し合ふといふことは、道德の美であるが、物は近きより始むるのが順序であるから、先づ己が親族に對して、親切を盡すべきである。兄弟は、年長者と幼年者との區別こそあれ、其の本を質すと、一體一支であつて、俗に謂ふ、水入らずの關係である。そして同じ膳の飯を食ひ、同じ家に育ち、同じ場處に遊び戯れ、同じ父母の惠をうけて成長するものであるから、互に相愛して、仲善く暮さなければならぬ。友愛は、各自の精神に於て、非常に愉快を感ずるばかりでなく、他人からも愛敬をうけて、最も幸福

なる生活を遂げることができるのである。

然るに、若しも之に反して、兄弟和睦せず、常に鬩牆をすれば、各自の良心の内ては、不滿足を覺え、父母親族には大なる迷惑をかけ、社會よりは遠ざけられて、不幸なる生涯を招くばかりてなく、遂に一家の滅亡を來たすやうなことにもなる。

世間には、兄弟喧嘩をして、恥を恥とも思はぬ輩が往往あるが、其の鬩牆の起因は、多くは家督相續にあるやうである。家督相續の事は、國によつて、習慣、制度を異にし、個人間に於ても、亦特殊の事情があることもあるから、一概に批定する譯にはゆかぬが、併し道德上から云へば、其の條件が如何てあらうが、其の理由が那邊にあらうが、兄弟間の不和は、絶對的に不道德であるのてある。何故かとなれば、是等の諍擾は根本的に友愛の情理に違背するからてある。

試みに思へ、血肉を分けたる兄弟が、權利、義務を主張して、よし巨萬の富を得たものがあつたとしても、人は、其の怜悧を褒めないで、寧ろ茅屋破窓の下に、苦

樂を共にせる兄弟があるのを見て、其の愛情の厚さに感ずるてはないか。物質は一時の榮華てあつて、而して友愛は千古の情理てある。されば世の兄弟姉妹よ、其の理を念ひ、其の情を盡して、以て精神的の幸福を得よ、是れ實に人倫の大義てある。

石野兄弟の友愛

石野權兵衛、弟市兵衛兄弟は、京都西洞院の東の桔梗屋といふ商家てあるが、兄弟ともに學問が好きで、堀川の流義を敬慕したのてある。その上兄は佛學を好み、殊に三論に通達したが、弟は本草に委しく、又畫を能した。そして兄弟とも音樂が好きて、音樂のある所へは如何に遠路でも必ずつれだちて行つたのてある。友愛の情は一方ならず深くて、兄が妻をもらつた後も久しく同居したのてあるが、弟が學問の爲め外出し、夜遲く歸るときも戸を敲くといふことはない、纔に咳をすると、兄は早速聞つけて戸を開けるのが常で、もし聞つけないと、朝まで門に立つて居る

といふ風である。母が死んでから五十日間は、其墓所鳥部山に、毎曉必ず參詣して香花を供へ、兄弟伴れで一日も缺かした事はない。死後でも斯樣であるから、生前の孝養推して知るべきである。市兵衛は一甫といひ、後同じ街の裏家に別居して、獨身で住んだが、夏でも冬でも頭を物でつゝみ、すびつの上に櫓を覆ふたのを、机にかへて書見をした。伊藤東涯、松岡玄達の二先生が折々にとはれて、話をせられる外、世間に知つた人はすくなかつた。草廬龍翁がまだ幼くて、學問をしたのは、此の一甫の勸めによつたといふ事である。

北條泰時

北條泰時は、至つて友愛の厚い人であつて。嘗て評定所に居たとき、冠賊共が、弟朝時の宅を圍んだといふ事を聞くや、早速徑から馳せて行つて、之を救助ふたのである。それから歸つて來ると、平の盛綱が諫めていふには、「公は天下の爲めに少

し自重せられぬといかぬ、輕卒に難に行くといふのは宜しくありませぬ。よし朝家の冠賊であつても、先づ敵の形勢を覘つて、之が方略を爲さなければならぬ。其の時には、盛綱等は命を奉じて事を辨ずるでありませう。今後注意せられぬと、恐くは他の譏を招き禍を來すでありませう」といへば、泰時は、「人間と云ふ者は、親しい者を親しむと云ふことが何よりも大切なものである。敵が私の弟を殺さんとするに、坐視して救はなかつたら、其れこそ天下の譏を招くのである。朝時が冠に圍まれたのは、他人から見たら、小事でもあらうが、我の身に取りては實に大事である」といつたので、朝時は之を聞いて、益々敬重したといふことである。

板倉勝重

勝重が所司代となつた時、或る人が黃金三兩を拾ふて之を訴へたので、勝重は此の事を通衢に掲示すると、其の遺主が出頭して、「我が金を捨てゝ、彼の人がこれを

拾ふのは、皆天の然からしむるところであるから、私は此の金は取らない」といつて受取らず、拾つた者も亦受けず、相讓つて決しないものであるから、勝重嘆賞していふには、「是れは所謂堯舜の民である。圖らずも予が叔世に生れて、此の樣な訴を聽くを得たのは、實に予の幸である。これを紀念として以後交を結ばう」と、自分で金三兩を出し、併せて六兩として、之を三分して各々二兩を取り、且ついふには、「汝等二人は兄弟の如く親しんで、如何なる事柄でも、言ひたいことがあれば必ず來て予に告げよ」と、厚く慰めて之を還したといふことであるが。かゝる潔白な精神を以て交はつたら、其の友愛の情は千古に變るものでない。

葡萄牙人兄弟

今を距ること、四百年ばかり以前の事であるが、東印度の葡萄牙の殖民地で、最も繁昌なゴーアへ赴かんと、一曳の葡萄牙の商船が水夫、旅客、僧侶抔、總べて二

百人ばかりを乘せて、リスボンを出發した。初めのほどは、海上も大變穩かであつたが、亞非利加大陸の南端なる喜望峰の緣を廻つて、北東の方へ向つて進んだときどうしたことか、忽ち暗礁に打ち觸れて、船は毀れ、海水は注ぎ入り、今にも海の底に沈まんとするので、船長は甲板の上に繫いであつた一の端艇を下し、乾麵麭一袋と黑糖四五箱とを艇中に投げ入れて、自身の外に、十九人と共に端艇に飛び乘り、劍を揮ひまわして、餘の人の乘るを防いだ。それは端艇が少さくて、多くの人が乘れば、直ちに覆へるからである。飲料一滴の貯もなく、只雨が降つたら、それを飲水にする目的で、何處とも定めなく、印度洋を乘り出したが、本船は夥多の不幸なる乘合人と共に間もなく沈んだてあらう。斯くて洋中を漂ふ間に、以前より頗る衰弱して居た船長は、遂に四日目に至つて死んだので、端艇の中は俄かに混雜し各自船長の有樣となつて、何人の命にも從はず、治まるやうにも思はれなかつたから、遂に船長一人を撰んで、其の命に從ふことゝなつた。然るに新に撰ばれた船長

は斯る乏しい貯で、多くの人の食料に充て難いゆゑ、何人でも、籤を抽し、當つたもの四人を艇から除き去らうといひ出した。此の時、總乘合人は十九人であつたが僧侶は、萬一覆沒の際に、讀經回向の勤があり、大工は、艇が破損して、海水が注ぎ入るのをつくらう用があるので、籤をひく數に入れず、船長は、固より重い役があるからとて、これも籤より除かうと、一同から云ひ出したので、我一人さうは出て來ないと、稍暫くの間は承諾しなかつたが、衆人の言に敵しがたく、遂に承諾すると、今は十六人の中から、四人死することゝなつた。斯くて四人の中、三人は、宗旨の禮式に從つて、末期の祈を終つて、潔く海中に飛び込むだが、今一人は、葡萄牙の紳士で、兄弟共にこの艇にあるので、弟は、今しも兄が艇から飛び下りんとするを見て、しかと抱き止め、兩眼に涙を浮べ、卿には妻子あり、又三人の妹もあつて、卿に賴り居る大事の身、私は獨身で、さしたる累もなければ、卿の代りに私をと乞ふと、兄は「斯る場合に如何なる人にせよ、他人を身代に立てることは不義の至

りである。まして骨肉最愛の弟を、どうして身代に立てられやう」と、聽き入れなかつたが、弟は跪いてしがみつき、引き分たうとしても放さない。兄は語を續けて「卿は生き殘つて、吾が子供等の父となり、吾が妻を助け、吾が財產を受けとつて妹たちの成育をたすけてくれ」とさま〳〵に言つたが、更に聽き入れず、暫の間は互に死を爭ふたが、兄は、弟のいと切なる心を仇になしがたく、遂にその願にまかすと、弟は直ちに水中に飛び込んだ。けれども、游泳に熟練して居たので、忽ちにして艇にとりつき、片手にて舵の柄を捉へた。すると、一人の水夫が腰刀で其の手を斬りをとしたから、水中に落ちたが、一生懸命の力をふるつて、再び片手て艇の端を捉へたので、又斬り落された。斯くて猶兩足と、斬られた兩手て泳ぎつつ、水面に浮んて居たが、艇中の人々此狀を見て、兄弟の恩愛を思ひやり、不愍の情に堪えかね、彼れ一人のことなれば助けてやらうとて、遂に救ひあげて、さま〳〵に手當を施した。かくて終夜漂ひ流れて居つたが、未明の頃、漸く一つの陸地を見出した

こは葡萄牙の殖民地より程遠からぬ、亞非利加のモーザムビクイと稱する山であつた。其處に着して、止り居る中に、リスボンより次便の船が、其處を通つたので、それに乘り移り、恙なくゴーアに着したといふ。

精神修養（終）

大正十四年三月十二日印刷
大正十四年三月三十日發行

國民叢書
—(21)—
精神修養

定價四拾錢

著作者　東京市牛込區新小川町二丁目四番地
發行者　小林善八
東京市牛込區新小川町二丁目四番地
印刷者　文藝社印刷部

發行所　東京市牛込區新小川町二丁目四番地
（振替東京二一一〇二番）
文藝社

賣捌所　東京市神田區美土代町三丁目一番地
（振替東京三三〇七番）
文陽堂

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

新しき修養

噛み碎かれたる修養書！現代人心の榮養！かた苦るしい修養書の弊を補ふために、格言により例によりつとめて肩のこらぬやうに修養の目的を達しようとしたもの。

宗教早わかり

宗教は思想統一！安心立命の境地！世界多くの宗教中から特に十大宗教を選び、教祖教義、現今の狀況を述べたもの。

立志より成功への近道

成功への指導書！立身への秘訣！小學校を卒業して直ちに入る學校を調査したもの早く成功しやうとする人々の唯一の指針である

東京新小川市牛込區二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

國民としての常識

國民常識の精髓！日常生活の羅針盤！東洋の大國民として體面を維持するに必要な知識を選んだもの。何人も之だけは心得て居られぬならぬ。

新聞を讀む基礎の知識

新聞を讀まぬ者なし！本書を俯へざるはなし！新聞を讀む効果を一層大きくしようとして、各部門により基礎となる知識を述べたもの。

日常科學の話

科學知識の普及！文化生活の基礎！由來我が國民は科學的知識に乏しい。本書は日常吾々の遭遇する科學現象を解釋したるもの。

東京新小川市牛込區二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

經濟學の知識

經濟生活の指針！
先進國民の必携書！
專門的經濟書の弊を補ふ目的を以て、通俗的に經濟學の根本を述べたもの
一讀經濟學の何たるかを知り得る。

偉人の修養

偉人の日常生活を見よ！
而して吾人の生活を樹てよ！
古來の英雄偉人といふ人々の背後にかくれたる修養談を集めたるもの。現代人の以て手本とするに足る。

哲學早わかり

現代人の要求！
人生觀の樹立！
如何なる民族も哲學を持たざるはなし、今日哲學要求の聲や高し。
本書は一讀哲學の何たるやを知らしめんとす。

東京市小石川區牛込町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

新しき年中行事

國民性の發露！
國民の風俗史！
建國の昔から行はれてゐる年中行事を取捨選擇して時代の流れに適合するやうに述べたものである

藝術の話

文化民族の心の糧！
現代人の必備書！
藝術といふ言葉を使ふ人でも藝術の何たるかを知らない人がある。
本書は藝術全般に亘つて平易に述べたものである

文化生活の基調

新人の新生活！
文化生活の建設！
文化生活といふ語を口にすること多けれどその根本的精神を知らざるものあり本書はその基調を說いて文化生活を明かにせるもの

東京市小石川區牛込町二ノ四　文藝社　振替口座東京二一一〇番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

思想善導

思想善導の急務！外來思想の消化に困つてゐる我が國民はともすれば危險に陷るかと思はれる今日、本書は思想善導の基礎を說いて示したものである。

野球の話

國民體育の向上！今や如何なる山間の地に於ても野球の行はれてゐない所はない本書は初めて野球をやる人のため、野球を見る人のために書いたもの。

論理學早わかり

正しき言論の必要！正しい言論をしようとするには、その知識がなくてはならない即ち論理がそれである。それをつとめて平易に述べたもの。

文藝社　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

青年の進むべき道

國家の中堅とも云ふべき青年が如何なる方面に進むべきかを述べたもので迷路にある青年の爲めに其の進路の定矩を示したものである。

斯の如き人は成功する

成功すべき人はどこかに人に秀でた性質を持つてゐる。本書は古來の成功者中から成功すべき性質を抽象して述べたもの、成功を望む者の福音書。

音樂の知識

世の文化の進むにつれて各種の藝術は勃興する、本書は殊に最近隆盛を極めつゝある音樂に關する凡ての知識を集め解說を施したものである。

文藝社　東京市牛込區新小川町二ノ四　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

心理學の話

精神科學の根本！各自の心的現象を知れ！あらゆる精神科學の根本となる、各自の心の働きを、解し易く、而も全般に亘つて述べたもの、一讀心理學の何物かを了解し得。

婦人の進むべき道

婦人問題の解決！現代婦人の進路！婦人問題のやかましい折柄、婦人の進路を明かにすることは何よりも大切である。本書によれば誤りなき進路を見出し得らる。

理想の家庭

笑ふ門には福來る！生活改善は目下の急務！家庭生活は人間生活の根本である。本書はあらゆる方面より考察して理想的の家庭への指導をなせしもの。

東京市小川町二ノ四　新牛込區　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

國民叢書

四六判百餘頁　小林鶯里著　定價各四十錢　送料各四錢

教育學の話

教育は國家の基礎！文化生活への捷徑！教育の必要は明かなるも教育の何物かを知らざるものあり。本書は通俗的に教育全般を述べしもの。

倫理學の話

人倫の道は總ての根本である。倫理は學者のみの學問ではない國民一般の心得べきことである。本書によれば一讀直に倫理學の大綱を了解せらる。

貯金のすゝめ

貯金は事業の根本！現代生活の確保と安定！今や全國一齊に勤儉貯蓄を勵行す。まづ一家の生活を安定にすれば國家亦榮ゆ。本書はあらゆる貯蓄法を叙べしもの。

東京市小川町二ノ四　新牛込區　文藝社　振替口座東京二一一〇二番

◇文部省認定の良書◇

日本國民史

小林鶯里著

歴史は即ち一國の履歴書である、日本歴史は之れ我帝國、我建國の履歴書で、苟も我帝國民として我國の歴史に暗いのは、即ち自分の履歴を知らぬに等しく、まことに恥しきことである。殊に我帝國には世界に秀絕したる精神がある。我憲法も此の間に起原し、我國民道德も此のところより胚胎して居るのである。この國體、此の精神も亦我國史を外にして說明は加へられぬ。本書は天孫降臨に始め、現今聖代までの要項的史實、および忠臣、義士、孝子、賢婦等、有ゆる方面に亘つて系統的に敍述したもの、即ち建國三千年の歴史を極めて通俗的に筆を進め、史實趣味を普及せしめんとする主旨のもとに刊行したものである。

第一卷 建國より平安朝へ
第二卷 源家と平家
第三卷 鎌倉幕府時代
第四卷 吉野を護る人々

四六判洋美裝
各冊百餘頁
定價各五拾錢
送料各四錢

東京市牛込區新小川町二ノ四
文藝社
振替口座東京三一一〇二番

◇文部省認定の良書◇

興亡五千年史

小林鶯里著

個人に日記のあるが如く、家に記錄の存するが如く、何れの國にも亦建國の昔から歴史を持つてゐることは人類自然の欲求に基くものである。更に範圍を廣くして世界人類の創生期から今日迄の出來事を記し、興亡の跡を尋ねるといふことは一つには著しい事件を後世の人類に傳へ、一つには過去の事柄を知らうとする要求を滿足させる爲めに最も意義あり、且大切な事である。然るに今日見る幾多の歴史は、或は程度の高きために、一般の人々に適せず、或は事實の簡に過ぎたるため了解に苦む場合が多い。著者はこの點を考慮して、傳說時代の世界より筆を起し、努めて平易に、五千年に亘る國家の興亡と、それに聯關せる偉人、豪傑の事蹟を述べ、吾が同胞に向つて世界人類の殘したる業蹟を知らしめようとしたものである。ともすれば無味乾燥に流れようとする歴史の弊を補はんがため、極めて通俗的に、而も詳細に、且つ興味を中心に述べし所は著者の新しい試みとして讀者に批判を仰がんとする所である。

第一卷 傳說の世界
第二卷 文明の誕生
第三卷 アテネ、スパルタ時代
第四卷 ギリシヤの文明

四六判洋美裝
各冊百餘頁
定價各六拾錢
送料各四錢

東京市牛込區新小川町二ノ四
文藝社
振替口座東京三一一〇二番

◇文藝社新刊圖書◇

或る學生の手記

西尾操著

四六判美裝
三百餘頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

小林鶯里序——曩に詩歌集銀蘭の歌へるを上梓し、その純眞なる感情と、流麗なる筆致とを以て讀者を陶酔せしめた西尾君が、此處に氏の感想小品、創作を集めて世に發表せられんとす。

氏は夙に俳聖芭蕉の生活を私淑し、彼が自然に對して熱烈なる愛着を感じ、旅から旅をさ迷つて、大自然の神秘を探り、閑寂を求めんとする心に深く憧憬し、旦つて自然兒國木田獨歩が熱愛せし武藏野の丘に佇みては、蕭條たる多の木立に寂寥の涙を流し、靜かに地平線下に暮れんとする晩秋の落日を眺めては淋しさに哭し、この間に創作せられたる氏の作品が集つて本書をなしたものである。

實に本書は多感なる氏の涙の記錄である、體驗生活の歴史である。言々句々深遠なる哲學的の思索と、深刻なる人生の凝視とより生れたる所に、層一層の力强さを示してゐる。

東京市新宿區小川町牛込ノ二ノ四
文藝社
振替口座東京二〇一一番

近松傑作集

四六判美裝
各冊百餘頁
定價各五拾錢
送料各四錢

第一編　心中天の網島
第二編　曾根崎心中
第三編　津國女夫池

以下毎月刊行

日本の產んだ唯一の藝術家、近松門左衞門の傑作を選み、正確と嚴密なる校訂を施し、振假名を附し、最も讀み易くしたもの。

◇好評嘖々！

◆本書は早稻田大學及各高等學校文學國語科の參考書に採用せらる!!

東京市新宿區小川町牛込ノ二ノ四
文藝社
振替口座東京二〇一一番

◇文藝社新刊圖書◇

西尾操・小林綾子共著

若人の胸へ

菊半截判
糊パブリン美裝函入
三百二十餘頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

詩・短歌・AとBとの間に取り交されし感想の三部より成る

情熱に燃ゆる戀愛の記錄

著者より――此の書を讀んで下すつた諸兄姉方よ。若き日のピンクの夢に、日毎夜毎離れて行く私共の身をなげきつゝ、ハートの高鳴りも日に日に低くなつて行く私共の運命をかこちつゝ、私共はこの書を若人の胸へ永久に刻みつけたいと、ひとへに願つてゐます。

――後序より。

東京市小新川町二ノ牛込區四ノ
文藝社
振替東京二〇一一番

◇文藝社新刊圖書◇

創作

結婚魔

四六判美裝
三百餘頁
定價壹圓五拾錢
送料八錢

小林鶯里著

現代の青年男女の風俗を描したる諷刺的大文字！

註文殺到重版に遑なく、近來稀に見る流行の創作はこれ！

東京市小新川町二ノ牛込區四ノ
文藝社
振替東京二〇一一番

◇各種營業者宣傳能率增進の玉手箱◇

全國各種學校名簿

○大學○高等學校○專門學校○師範學校○中學校○高等女學校
○商業學校○工業學校○農業學校○其他高等中等程度の學校名、所在地を府縣別に排列網羅す、此種の書他に絶對に之なきを斷言す。

四六利全一冊
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

全國圖書館名簿 新聞社一覽

◇全國の官公私立圖書館所在地と全國新聞社を府縣別に排列網羅す。

四六判全一冊
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

出版關係法規

◇出版法、著作權法を初め雜誌の郵便規程迄悉くを網羅す。

四六判全一冊
定價壹圓貳拾錢
送料八錢

◇東京市牛込區新小川町二ノ四◇ 文藝社 振替口座東京二一一〇番◇

◇文藝社新刊圖書◇

小林鶯里著
新しき童話集
定價壹圓參拾錢
送料八錢
繪表裝 石版刷 口繪 函入

此の本をお讀みになる少年少女の皆樣はきつと寢る事も御飯を食べる事も忘れます——本書が盛んに賣れることはソモ何を語るでせう。

小林鶯里著
僕の好きな英雄
定價壹圓
送料八錢
繪表裝 石版刷 口繪 函入

古來の英雄は皆子供のときから拔ん出た所があります、本書は一番拔ん出た英雄の傳說を面白く著はしたのであります。

文藝社編輯部選
歷史趣味の講談
定價壹圓貳拾錢
送料八錢
繪表裝 函入

從來講談本と云へば中流階級以上の讀者は其の書を手にするを好まなかつたが、本書は內容に一大改善を加へ、演者を選み、材題に注意し通俗敎育の資料として立派な社會的讀物である。

— 讀者の文藝を主とせる —

雜誌 **文藝** 月刊

毎月一日發行——定價貳拾五錢 送料一錢

◇文藝を手にせずして文藝を語る不可

◈文藝趣味の鼓吹！

隱れたる青年文士を世に紹介せんとす。

諸君の作品に對しては絶對の尊重を與ふ。

誌上を開放し讀者にはあらゆる自由を與ふ。

定價の至廉なるは利益主義に非ざる事を證す。

趣旨に於て他の雜誌と異るところを誇りとす。

讀者諸君自身の雜誌！

散文（抒情、叙事、叙景、）感想。短文。

詩。短歌。俳句。川柳。情歌。

毎號懸賞募集（毎月十五日締切）

◈純粹文藝の宣揚！

◇學生諸君及投稿家唯一の機關雜誌！

東京市牛込區新小川町二ノ四 文藝社 振替東京二一一〇二番

文藝社

615
99
た

終